

mundi

The Magazine of the Japan International Cooperation Agency

[ムンディ]

7

2018 July
No.58

特集 観光と開発

恵みをもたらし 旅に出る

02 **my photo**
地域の魅力、色とりどり エクアドル

04 **特集 観光と開発**

恵みをもたらす旅に出る

自然や文化を特別な観光資源に ベトナム
文化と歴史がつなく新しい観光の軸 エジプト
世界に誇れる観光地を目指して ミャンマー
観光開発はすべてのSDGsに貢献する!



18 **JICA Volunteer Story**
できることを広げていけばいい 塚元夢野 ジャマイカ

20 **PLAYERS**
文化資源学で取り組むティカルの観光開発 金沢大学 国際文化資源学研究中心

22 **世界とつながる教室**
学びの場としてのエコツーリズム 新谷雅徳 静岡県富士宮市

24 **JICA STAFF**
久保信也 産業開発・公共政策部

25 **JICA UPDATE**

26 **Voice**
たかのてるこ 地球の広報・旅人・エッセイスト
生きとし生けるもの、
すべての幸せを祈る人たち

28 **ココシリ**
持続可能な観光

30 **地球ギャラリー** ウガンダ

真珠の恵みを明日への布石に

36 **もっと地球ギャラリー**
ウガンダから来たライオンのフラビア

37 **イチオシ!**
イベント、コンテスト、映画、本紹介

38 広報室から、プレゼントほか

39 **MONO語り**
バナナの繊維が丈夫な紙に大変身

40 **私のなんとかしなきゃ!**
大野いと 女優



©たかのてるこ



©木下貴史



ベトナム、ゲアン省のヌア村では、伝統の踊りや音楽を体験することができる。
写真:光石達哉



エクアドル 共和国

my photo

写真・文
河村美沙

青年海外協力隊(コミュニティ開発)として2016年からエクアドルへ、開発資源の調査・研究を行いながら、地域活性化プロジェクトのために奮闘中。

from Ecuador

地域の魅力、色とりどり

私が青年海外協力隊として活動するのは、キト中心部から2時間ほど離れた町、プエジャロです。地域の人たちは自分の町が好きで、愛する町の魅力をいろんな人知ってもらいたいと思いつつも、プエジャロには観光できるものが何もない」と言われていました。

そこから、地域の人たちと一緒に始めたのが観光ツアーでした。写真はツアーの最後に見せる伝統的なダンスです。アンデスの音楽に色とりどりの衣装、軽快なステップ。披露する若者たちは少し緊張した面持ちですが、観光客は、ここで見られないダンスにカメラを構えたり、身体を揺らしたりして楽しんでくれました。さすがは南米の国、やはりみんな踊るのが大好きで、最後には観光客も一緒に踊り出します。

ペルーチヨの町を拠点に、地元の人たちとともに試行錯誤を重ねてもうすぐ2年。町に根づく文化を大切にその魅力を発信し、地域が活性化することを目指して今日も活動を続けます。

あなたの作品募集中!

「my photo」では、あなたが撮影した写真を募集しています。貧困や環境問題などをテーマにした写真、国内外を問わず国際協力の最前線で活動する日本人や開発途上国の人の姿、テレビや新聞ではなかなか報じられない土地の風景や人々の暮らしなど、国際協力や途上国を身近に感じられる写真を、撮影時のエピソードを添えてご応募ください。応募作品の中から毎月1点を、本コーナーで紹介させていただきます。

応募・問い合わせ先 ▶ ML_JICAPR@jica.go.jp (「mundi」編集部宛)

世

界を旅する観光客の数は年間13億人を超えている。今後も増え続けると予想され、いまや旅行・観光産業は世界のGDPの約10パーセントに貢献する巨大産業となっている。観光の経済効果はなぜ大きいのか？

JTB総合研究所の首席研究理事でJICA技術専門委員も務める高松正人さんは、「観光には人を巻き込む力がある」と話す。たとえば、観光客はホテルに宿泊し、レストランや商店、観光施設でお金を使う。そこには働く人が大勢いる。食材は地元から調達することが多いため、農家や漁師の手が必要になる。ホテルのショップで販売される民芸品は、品質の高さを求められ、おのずと職人のスキルが向上する。こうして観光産業には、多くの人が関わることになる。

「旅行者が旅先で1000ドルを使うと、そのお金は地域内の人々をめぐりめぐって最終的には250ドル消費されるような波及効果を生み出します。観光とは波及効果の大きいビジネスです」

そして、雇用を生むということは、職を求めて故郷を離れてしまった若者たちが地元に戻る契機となる。町や村は観光振興によって高齢化や過疎化から抜け出し、コミュニティの維持を続けていくことができる。

「JICAの専門家として訪れたインド北東部のシッキム州では、エコツーリズムの開発によって村落に若者が帰ってきました。標高2500メートル超の何も無い村落に、です。観光が地域に与えるインパクトは非常に大きいものがあります」

特集 観光と開発

恵みをもたらず旅に出る

観光の開発は、地域に雇用を生み出し、町や村にうるおいをもたらす。

JICAは付加価値のある持続的な観光の開発をめざし、途上国とともに活動をしている。

取材協力●JTB総合研究所 首席研究理事 高松正人
文●田中弾(編集部)

日常にあるものを磨き上げていく

JICAの観光にかかる協力開発はこれまでさまざまな国で進められている。どのような国からどのような人を呼ぶかターゲットを決め、彼らが旅先で何を求めているかを探り、自然や歴史的遺構、その土地の文化や食などの観光資源をもとに、現地の人と協力して観光客を引きつける観光商品を開発する。JICAの協力は道路、上下水道、博物館などの観光施設といったインフラの整備から、自然・文化・歴史の魅力を味わう観光商品の企画・開発やプロモーションなど多岐にわたっている。そして、現地の地域社会の生活と観光が調和するように、環境を破壊せず、土地固有の文化を尊重し、経済的にも自立できるという三つの面での持続可能なツーリズムの実現も後押ししている。

また、最近の観光トレンドが体験型にシフトしていることから、その変化にも柔軟に対応している。「体験型とは、その地域ならではの日常生活を体験できる観光のことです。インドネシアのバリ島には、山間の田園地帯を走るサイクリングツアーがあります。そこで出合えるのが稲作の三期作、四期作です。田植えと稲刈りが同時に行われている光景を体験できま

す。ツアーの最後に農家のおかみさんと現地の食材&スパイスを使ってクッキングをします。ここでしか体験できない特別な時間は強心に残るものとなり、旅の満足度を高めます」

観光は、世界中の地域と競争する産業であり、ノウハウや資金力の少ない途上国は不利になりやすい。しかし、そこでしか体験できない「オンリーワン」を探り当て、観光の魅力としてアピールすることで競争力を高めることはできる。「ただ、旅行者のニーズに合わせてブレゼンテーションは必要です。クッキングのプログラムであれば衛生的なキッチンと清潔な食器を用意するなど、旅行者が抵抗なく受け入れられる付加価値をつけることが大切です」

ちなみに昨年、WTTTC(世界旅行ツーリズム協議会)と国際平和研究所が、共同調査による観光と平和のレポートを発表した。そこには、観光開発が動き出すと雇用が生まれ、貧困層に所得が回り、格差が減少して生活水準の底上げが図られるため、国の平和の指標レベルが高くなると書かれている。「『平和だと観光が成り立つ』ではなく『観光が平和を作り出す』ということです。興味深い内容です」

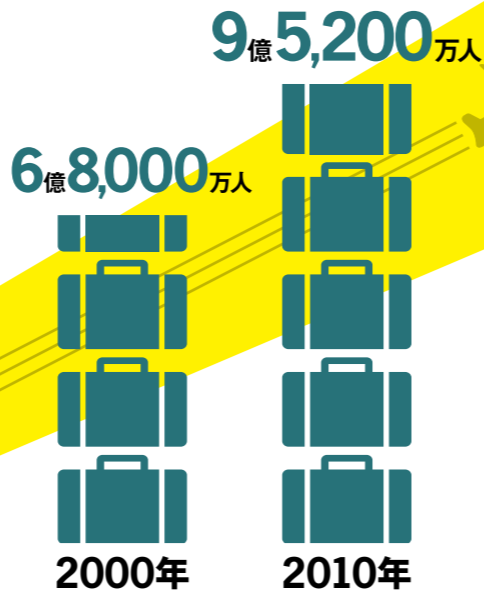
観光開発は、観光客にとっても地元の人にとっても喜びを生み出すものなのである。



13億人以上が 世界を観光する時代

世界の海外旅行者数*1はここ20年の間、ほぼ順調に右肩上がり伸びている。一時減少した年(2003年のSARS*2とイラク戦争、2008年の世界金融危機)があったが、それ以外は年々4~5%ずつ成長を続けて2017年は13億人を超えた。2030年には18億人に達するという予想もある。

= 2億人



*1 海外旅行者数
UNWTO(国連世界観光機関)発表による、1年間あたりの国際観光客の到着数(宿泊を伴う)、ビジネス他も含む

*2 SARS
重症急性呼吸器症候群。中国の広東省で発生し、インド以南のアジアやカナダを中心に感染が拡大。32の国と地域にわたり8,000人を超える症例が報告された(厚生労働省検疫所FORTH)

出典: World Tourism Organization (UNWTO) © 法務省入国管理局「日本人出国者数」、日本政府観光局(JNTO)「訪日外国客数」の資料をもとに作成

18億人に達するという予想も

2017年の日本人の海外旅行者数は
1,789万人
訪日外国人旅行者数は
2,869万人
*ビジネス他も含む

多くの人が移動し、多くの人がお金を使う観光は、世界の経済活動に大きな影響をおよぼしている。一大産業に成長した観光をデータで見てみよう。

観光の今を知る

今注目の体験型観光!

●体験型の観光とは!!

近年、その土地でしか体験できない体験型の観光が盛り上がっていて、観光振興を進める国や地域では、さまざまな趣向を凝らした体験型プログラムが充実してきている。旅の楽しみがますます広がっている。



世界の雇用に占める割合

旅行・観光産業は世界でも有数の雇用創出産業の一つ。1億1,800万人以上の人々が直接雇用されていて、これは全雇用の3.8%にあたる。間接的および誘発的な影響*3を含めると3億1,300万人以上になり、世界の雇用の9.9%になる。10人に1人が旅行・観光に関わる職業に就いている。

世界の雇用の **9.9%** = **10人に1人**が旅行・観光に関わる職業に就いている

出典:「世界旅行ツーリズム協議会:旅行・観光:世界における経済的影響と課題2018-2018年3月。全著作権所有」をもとに作成

*3 間接的および誘発的な影響

- 間接的
以下3つの要因を持つGDPと雇用への貢献を指す
●宿泊施設や旅客輸送機器、特定の観光目的のレストランやレジャー施設など特定の観光資源に関する他の業種が費やす投資など
●観光振興、旅行者情報サービス、行政サービス、その他の公共サービスなど
●旅行・観光産業内のさまざまな職種による直接的な国内の財やサービスの購入
- 誘発的
旅行・観光産業によって直接的または間接的に雇用されている者による支出のGDPと雇用に関する幅広い貢献

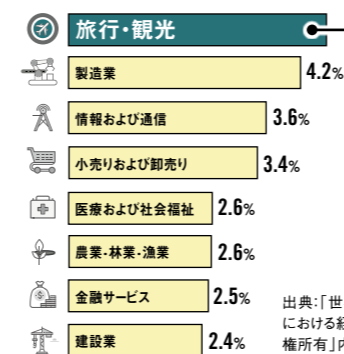
世界のGDPの **10.4%**に相当 **10.4%**

旅行・観光産業が世界のGDPに占める直接貢献の割合は3.2%。間接的および誘発的な影響*3を含めると10.4%にもなる。

出典:「世界旅行ツーリズム協議会:旅行・観光:世界における経済的影響と課題2018-2018年3月。全著作権所有」をもとに作成

世界の経済成長をけん引する

2017年の旅行・観光産業の成長率は、世界経済の成長率3%を上回る4.6%を記録している。他分野の主要産業と比べると、製造業は4.2%と急成長しているが、それ以外は2.0~3.0%にとどまる。旅行・観光産業の成長率は非常に高い。



4.6%
観光産業の成長率は世界経済の成長率(3%)を上回る

出典:「世界旅行ツーリズム協議会:旅行・観光:世界における経済的影響と課題2018-2018年3月。全著作権所有」内のOxford Economicsの資料をもとに作成



教えてくれた人
JTB総合研究所 上席研究理事
高松正人さん

業界歴36年の旅行・観光コンサルタント。WITC(世界旅行ツーリズム協議会)、UNWTO(国連世界観光機関)等の国際機関のアドバイザーをはじめ、JICAの技術専門員としても活動し、観光分野のJICA青年海外協力隊の支援にも当たる。日本における観光危機管理の第一人者としても知られている

持続的自然资源管理プロジェクト × ヘリテージツーリズムによる
 辺境農漁村の生計多様化プロジェクト

自然や文化を特別な観光資源に

山間部を中心に53もの多様な少数民族が暮らし、
 貧しい生活を送る人々もいるベトナム。
 観光開発で新たな雇用を生み出し、自然や特有の文化を守り活かし、
 JICAの二つの取り組みに迫った。

文 ● 光石達哉

ベトナム

国名	ベトナム社会主義共和国
首都	ハノイ
通貨	ドン (Dong)
人口	約9,370万人
公用語	ベトナム語

豊かな観光資源を新たに活用するため、ベトナム中部高原のビズップ・ヌイバ国立公園では自然を守りながら住民の生活を向上させる住民主導型エコツーリズムを実施。中北部のヌア村では、少数民族固有の暮らしや文化を体験する体験型観光のプロジェクトが進められている。



森は私たちの宝物



世界で唯一この地方にしか生えない固有種の松の葉(写真中央)。キノコ(写真右)やヤマモモ(写真左)なども貴重な資源として守る



トレッキングガイドを務めてくれた少数民族コホ族の若者。エンルイさん(写真左)は国立公園の職員。サクリーさん(写真右)はふだんは短大で観光について学ぶ学生で、住民主導型エコツーリズムの一員としてガイドや森林パトロールの仕事をしている



ビズップ・ヌイバ国立公園内のトレッキングコースで見られる「ソイ・フライアンの木」。樹高28mと公園内で最も高い

「これは2枚1組の平らな葉を持つ原始的な松の木で、世界中でもこの地域にしか生えていない固有種です。幹は1年間に1ミリと生長が遅く、直径2・5メートルまで大きくなるのに約1000年かかります」

教えてくれたのは、ベトナムの少数民族コホ族の若者サクリーさんだ。短大生のサクリーさんは、ベトナム・ラムドン省のビズップ・ヌイバ国立公園で、不定期にトレッキングガイドを務めている。2004年に国立公園に指定された同公園は、標高約1500メートルの中部高原に位置し、避暑地として人気の高い観光都市ダラットから車で1時間ほどの距離にある。シンガポールの面積とほぼ同じ約7万ヘクタールの同公園内に、固有種の植物や絶滅危惧種の動物が数多く生息する貴重な生態系を持っている。その一方で、問題も抱えていた。

「もともと公園内に住んでいた少数民族は国立公園の指定に伴い周辺への移住を余儀なくされました。彼らの生活は貧しく、公園内に侵入して農地の開拓や動植物の捕獲や採取といった違法行為をしなければ生活できない状況にありました」と説明するのは、専門家として現地の問題と向き合ってきた日本工営の小田謙成さんだ。そこでJICAは2010年

住民たちも森林の重要性を理解

に「ビズップ・ヌイバ国立公園管理強化プロジェクト」をスタートさせ、その中で、住民主導型エコツーリズムを立ち上げる。ことにより住民の生計を向上させることを考えた。

JICAは公園内に3種類のトレッキングコースを整備して、ビジターセンターの建設にも協力。ガイドやビジターセンターの展示物の説明は、研修を受けたコホ族

の住人たちが担当するようになった。すでに移住によってコホ族の伝統文化の一部は失われてしまっていたが、青年海外協力隊の協力によって機織りやゴングダンス(ユネスコ無形文化遺産にも登録)が復興され、それを観光客に披露するようにもなった。ふだんは農業に従事している住民たちは、必要に応じてエコツーリズムの仕事をして新たな収入を得られるよう

ビズップ・ヌイバ国立公園
 エコツーリズム環境教育センター・ディレクター
グエン・ロン・ミンさん

「JICAが作ってくれた観光の基盤をもとに、2013年のプロジェクト終了後も国立公園独自でトレッキングコースを増やしたり、宿泊施設やレストランなどを作ったりと拡大させてきました。毎年、観光客も20%ずつ増え、昨年はビジターセンターとトレッキングを合計して約2万人が訪れました。観光に携わる企業が地元住民を雇用する好循環も生まれています」



われわれの文化を
 伝えたい

ビジターセンター2階では、楽器や機織り機、農機具などコホ族の文化にまつわるものを展示。ガイドのハキムさんが実演を交えて解説する



コホ族の生計向上のためには農業の多角化も必要と、農家のポントツサガさんは今年の3月からキノコ栽培を試験的に開始した。「いま勉強中で、できたキノコは自宅や近所の人で消費しています」。テントなどの資材や菌床、栽培法の指導などはJICAが協力している

「観光の仕事はとても好きです。いろんな人と会えるし、自分の民族を知ってもらえるのは楽しい」トウモロコシやコメなどを育てながら、ガイドやゴングダンスなどとしても活動するコホ族の農家、ハキムさんの顔には笑顔がこぼれる。また、同公園のエコツーリズム環境教育センター・ディレクター、グエン・ロン・ミンさんも、よい流れができてきていると喜ぶ。

「住民の収入はコーヒー栽培などの農業と森林パトロールが大半です。エコツーリズムから得られるものはまだ少ないですが、当初は観光の仕事に戸惑っていた彼らも、その重要性に気づいて熱心に協力してくれるようになりました」

2015年からは、前プロジェクトの成果を引き継いだ「持続的自然资源管理プロジェクト」が始まっている。民間企業とともに観光商品作りに当たるほか、若い世代の環境教育の場として受け入れ体制の整備を進めていく。今年4月にはラムドン省とホーチミン市の中学生が2泊3日のツアーで公園を訪れ、自然の大切さを学んだ。「コホ族の住民だけで持続できるエコツーリズムを作っていくのが今後の目標です。価値を見出して自ら参加する人も増えていきます」と、小田さんは目指すべき道筋を語ってくれた。



ビジターセンター1階は、観光客が自然や環境についてパズル形式で楽しく学べる展示が並ぶ。展示物の内容は国立公園の職員とJICA専門家らの協力で作案された



ヌア村の住民が新たに建設しているホームステイ用の高床式住居。1階は倉庫や家畜小屋で、2階が住居となる。木材を使った伝統的な建築方法を用いる



地元の
とれたて食材で

野菜、肉、魚などその日の朝にとれた素材で調理したタイ族の伝統料理。味だけでなく、衛生面からも新鮮な食材にこだわる



近隣のファー村のオレンジ農園は、ヌア村の観光客向けにオレンジを使ったお酒やエッセンシャルオイル、芳香剤、石鹸などの特産品を開発。実が小さくこれまでは廃棄されていたオレンジを有効活用するため環境にも優しい



読者プレゼント
詳細はp.38へ

著でほぐして
取り分けます



料理の食べ方を教えてくれたのは、コンクオン郡の人民委員会副委員長(文化・社会担当)のカー・ティ・ティムさん。自身もタイ族で、伝統文化の保護に力を入れる



草の根プロジェクトの一環として日本人建築家の竹森紘臣さんが設計したトイレ。外壁に石をモザイク状に積んだもので、清潔で環境にも馴染むデザインだ



村おこしは
女性が主体

ダンスを披露するヌア村の女性グループ。ダンスや食事など、観光で働くのはおもに村の女性たち。フレンドリーなのがタイ族の女性の特徴だ



牛車がのんびりと進む、のどかな村の風景。観光客のために牛車乗車体験を始めたところ好評で、これも新たな収入源になった

村の生活を体験できる おもてなしを提供

首都ハノイから南西に400キロメートル離れた山間部にあるゲアン省コンクオン郡ヌア村。ここは住民の100パーセントが少数民族タイ族からなる集落だ。民族衣装をまとった女性たちが伝統的な高床式住居の前で出迎え、ダンスを披露してくれた。彼女たちのダンスは豊作を祈る、雨乞い、水汲みなど生活や自然がテーマになっている。

ヌア村では以前から住民が自発的に観光業を行っていた。もともとこの地域は農業中心の自給自足の生活だが、出稼ぎのために村外に出る人も多く、他の生計手段を模索していたという。しかし、観光客呼び込むためのノウハウがなく集客はかんばしくなかった。

そんなおり、ヌア村の持つ豊かな観光資源に昭和女子大学が着目し、2016年からJICA草の根技術協力をスタートさせて、トイレの整備、観光地図の作成などを行った。そして、高床式住居でのホームステイや地元食材を使った料理、ダンスパフォーマンスなど、ヌア村の生活をもとにした体験型の観光サービスを軌道に乗せていった。

努めた。そして「料理より挨拶」というアドバイスもあり、ヌア村では隣近所の人も観光客に気軽に挨拶しにやってくるという。

こうした観光のための活動は、タイ族の伝統文化や周辺の自然環境を守ることもつながっている。伝統的なダンスを披露できる機会が増えたことで、住民自身が踊りや衣装をより身近に感じるようになった。これまでは高床式住居の一部にコンクリートを使っていたが木材で建築するようになった。

18年5月、ホアさんを含むゲアン省の観光関係者4名は日本に研修に訪れている。東京都や神奈川県を巡り、山梨県の芦川町を訪問した際は、地元ガイドの歴史の解説に聞き入り、ほうとう作りを体験

し、農泊もした。「古民家が残る美しい集落で驚きました。それに何かを体験することはとても楽しいこと。私たちも自分たちの村のありのままを見せればよいと再認識しました」

昨年、ベトナムを訪れた外国人観光客は1290万人を超え、00年と比較して約6・5倍に増加している。GDPにおける観光業の割合は6・3パーセント、周辺産業も含めると14パーセントにも上っている。そして、ベトナムの少数民族が持つ文化の多様性が、外国人にとってさらに魅力的な観光資源となる可能性を秘めている。今後、産業として観光の発展と、住民の生活が豊かになることを期待したい。



地元の人とほうとう作りを体験

観光地作りを学ぶ研修交流ツアー

ホアさんたちが訪れたのは山梨県の芦川町。人口減に悩む同町は移住や「農泊」などで観光を通じた町作りを進めていて、ホアさんたちはそのプログラムを体験し、おもてなしを学んだ。「芦川町もヌア村も地元を活かそうと努力しています。交流によって刺激が生まれ、双方が地域の未来を考えるいい機会になりました」と安藤勝洋さん。

JICA草の根技術協力「ヘリテージツーリズムによる辺境農漁村の生計多様化プロジェクト」で中心的役割を担う安藤勝洋さん。ベトナムの観光開発に10年以上携わっている



ヌア村観光グループのリーダー
ロ・ティ・ホアさん

「ヌア村は自然に囲まれた魅力的な村で、私たちが環境を守りながらサービスを提供しています。もともと村人は自給自足の生活でほとんどお金を使っていなかったのですが、観光の仕事のおかげで1人1カ月平均300万ドン(約1万5000円)の収入が得られるようになり、生活が向上して貯金もできるようになりました」





運営する

大エジプト博物館の完成予想図。ピラミッドの造形を幾何学的に取り入れた現代的なデザインが目玉

ギザのピラミッドから車で約15分という立地の大エジプト博物館。写真は建設中の正面入口。ラムセス2世の像がそびえ立つ

大エジプト博物館関連プロジェクト 文化と歴史がつなぐ 新しい観光の軸

世界でも最大規模の、単一の文明を扱う博物館の建設と展示品の修復作業が進むエジプト。大エジプト博物館に関連する一連のプロジェクトが、現地にもたらすものとは？

文●笹浪万里江(編集部)

建てる
約10万点を
展示予定



修復する



イニ・スネフェル・イシテフの壁画修復を進める現地スタッフの横には日本の専門家の姿が。東京藝術大学などが協力している



世界からも注目の集まるツタンカーメン王のベッド。首都カイロの考古学博物館からセンターに移送されて修復を待つ



「壊さないこと」に細心の注意を要する梱包、搬送には、専門のノウハウを持つ日本通運が携わる

Arab Republic of Egypt

2 エジプト

国名：エジプト・アラブ共和国
首都：カイロ
通貨：エジプト・ポンド(LE)とピアストル(PT)
人口：9,304万人(出所:2017年エジプト中央動員統計局)
公用語：アラビア語、都市部では英語も通用

エジプトにとって一大事業である大エジプト博物館のプロジェクト。JICAは円借款による博物館建設技術協力において、展示品の保存と修復、開館後の運営・展示のノウハウを提供、そして「第二の太陽の船」復元の支援の四つの分野で協力を行っている。

JICA中東・欧州部
降旗 翔さん

「2019年の部分開館に向け、まだまだ調整すべきことは多いのですが、「最後は何とかする」のがエジプト。大エジプト博物館の運営・展示のために国際航業や三菱総合研究所も現地と協力して準備を進めています。これら一連のプロジェクトの貢献の証として、主要な展示品の説明パネルには英語、アラビア語に加えて日本語も併記される予定です。ぜひ現地で確かめてください」

JICA社会基盤部・平和構築部
峰 直樹さん

「大エジプト博物館の完成によって観光客が増えれば、周辺地域や産業への大きな波及効果が期待できます。人材育成による修復や移送技術の向上は、現地の人が自分たちで博物館を運営する助けになり、また職を得ることで生活の安定にもつながります。このプロジェクトによるエジプト経済への貢献は大きなものになると信じています」



取り上げ作業が進む、クフ王のピラミッドから出土した世界最古の木造船「第二の太陽の船」。吉村作治さん率いるNPO法人太陽の船復元研究所と共同でプロジェクトが進んでいる

悠久の歴史に ふたたび光を

大エジプト博物館(以下、博物館)は2019年に見込まれる部分開館に向けて、あのツタンカーメン王の遺品を含むエジプトの至宝の修復作業を、エジプトと日本の合同で進めている。現地の人々は当初、外国人に国宝を触れさせるなどもつてのほかという態度だったが、2008年から長年にわたって協力を継続してきた結果、日本ならば信頼できると、修復作業の協力が許されることになった。観光分野は、エジプト経済の重要な外貨獲得源の一つだ。豊富な文化遺産の有効活用はつねに議論されてきた。しかし、20万点ともいわれる文化財を収蔵する歴史あるエジプト考古学博物館は開館から100年以上が経ち、設備は老朽化している。展示スペースは十分でなく、さらに美術品の管理・修復を行う人材が不足していた。そこで、カイロの中心地からほど近いギザのピラミッドのすぐそばに、博物館の建設が始まった。

随所で生きる 日本のノウハウ

建物ができあがっても、博物館を運営するにはさまざまな専門知識とノウハウが必要になる。人材育成のため、エジプト政府は博

館の付属施設として保存修復センター(以下、センター)を設立した。JICAは2008年から同センターに対する協力を実施し、その計画・設計・運営にかかる体制づくりや収蔵品のデータ構築等に関する協力を行ってきた。「計画を立てようにも収蔵品に関する正しい情報がないのです。記録されている場所にもまったく別の収蔵品があったこともあり、まずはデータベース作りからのスタートでした」と振り返るのは、保存修復プロジェクトの総括を務める日本国際協力センター(JICE)の中村三樹男さん。文化財を計測し、写真撮影をして損傷状態を記録する「ドキュメンテーション」と呼ばれる作業のために、膨大な収蔵品がセンターへ集められた。梱包と移送の一部は日本通運が現地の人と協力して行った。

文化財の保存・修復のための多数の研修では、JICEや東京藝術大学などの専門家が協力した。初期段階として、まずはレプリカを使って現地の修復士の育成に努めた。「これまでに105回の研修を行い、のべ2250人が受講しました。その後、エジプト人専門家の保存修復の技術レベルも底上げされてきています。また最近では、エジプト人専門家が国外で開催されるシンポジウム等で活躍

動成果を発表する機会も多くなっています」
そして2016年11月以降、現在は、レプリカではなく「本物」の修復作業が始まっている。世界的な文化遺産の修復にわれわれ日本人が関わる責任は重大であるが、一方で、プロジェクト関係者には確かなやりがいをもたらしている。修復される文化財は、データベースをもとに①木製品、②染織品、③壁画および石材の3分野から72点を選ばれた。「リード(先行)遺物10点」と「フォロー(追従)遺物62点」に分類され、前者は日本人専門家とエジプト人専門家が共同で修復作業を進める。後者はエジプト人専門家が主体となってリード遺物の修復で習得した知識と技術を用いて作業を行っていく方針だ。

博物館が建設されている周辺では日本の協力によるカイロ地下鉄4号線の整備も進んでおり、エジプト政府はこの地域一帯を新たな観光の目玉として盛り上げていくとしている。エジプトの近年の観光客数は過去最高だった2010年の1473万人から、2016年には540万人にまで落ち込んだ。博物館の開館は回復の起爆剤として大きな期待を集めている。

村が変わった 意識が変わった

遺跡周辺の清掃



観光客や住民たちのごみのポイ捨ては大きな課題で、集落の人たちが道路や遺跡近くの清掃を定期的に行っている。子どもたちに向けて遺跡保全や環境の美化の意識を高めるワークショップも開催した

道路整備



道路にまで生い茂ってきた木々の除草作業を行う。観光客が遺跡にアクセスするときに見通しをよくしておくことで交通の安全性を高める

クッキングツアー



村の女性たちが自主的に始めたクッキング教室。現地の料理を村の人たちと一緒に調理して食べるのは観光客にとってまたとない経験だ。同様の取り組みが広がっている

案内板



遺跡保全地域内に、景観を損なわないようにシックな色彩で統一したデザインのサイン(方向などを示す看板)を設置。地元の人材を活用して持続可能な事業にしている。木材も地元産を使用

駐車場



以前は遺跡近くに観光客の車やバイクが乱雑に停められていたが、今は駐車場の整備によって整然とした場所に生まれ変わった。遺跡の上からの眺望も気持ちいいものになった

ビジターセンター



ビジターセンターはすでにある建物をリノベーションして活用。自治体の熱心な運営によって、観光情報だけでなく、バガンやコミュニティの歴史、写真コンテストの作品展示など活動が充実し、訪れる人も増えた

訪れたくなる文化遺産に



ミャンマー中部にある仏教遺跡、バガン。11世紀から13世紀にかけて建てられたバゴダや寺院が平原に点在する。リビング・ヘリテージ(生きている遺産)の考え方で、世界遺産への登録を目指している

地域観光開発のためのパイロットモデル構築プロジェクト

世界に誇れる観光地を目指して

2013年には世界中から約204万人が訪れ、20年には最大750万人になるともいわれているミャンマーの観光客。観光開発が国としても大きな課題となっているミャンマーで、バガン遺跡の観光開発パイロットモデルが完成した。

文●久島玲子(編集部)



Republic of the Union of Myanmar
 ミャンマー

国名	ミャンマー連邦共和国
首都	ネーピドー
通貨	チャット(kyat)
人口	5,141万人(2014年9月 ミャンマー入国管理・人口省発表)
公用語	ミャンマー語

2011年に民政移管して以降、著しい発展が目撃される国。100以上の民族が暮らしていて、最大の都市はヤンゴン。国内には多数の仏教寺院や遺跡があり、19世紀のマンダレー王宮などの歴史的建造物や田園風景、エーヤワディー川、北部のインレー湖など、自然、文化など多彩な観光資源がある。

多様な取り組みはコミュニティ活動へ

ミャンマーを代表する観光地といえば、世界三大仏教遺跡の一つに数えられているバガン遺跡だ。広大な平原の中に、3000を超え、大小さまざまな仏教遺跡が点在する景観は他に類を見ない。しかし、観光地としてのインフラやホテルの整備はまだまだ発展途上であり、遺跡や周辺エリアの保全活動もそれほどきちんとしたものではなかった。そこで観光開発モデルを作るべく、2014年から同国のホテル観光省とJICAがプロジェクトを進めてきた。

広がりをもせるコミュニティの取り組み

「最終的な目的は、バガンの観光開発マスタープランの作成です。観光管理・体制の強化、観光インフラ整備、観光人材育成の三つの柱を立て、それぞれに多数の試験的な取り組みを実施しました。その結果を考慮しながら、最終的な計画をまとめていきました」と、プロジェクトに関わってきたJICA産業開発部の浦野義人さんは語る。

バガンで伝統的な暮らしを守るウエストポウソー村では、ひとりの女性が、村の中で観光客に伝統料理を提供したり、料理体験のできるツアーを開催したりしたところ評判がよく、たくさんの人が訪れた。それを見た他の女性たちも同じような試みを始め、プロジェクトが終了する頃までには、観光客向けに伝統料理を提供するレストランなどが3軒オープンしている。これは住民の中から自然に生まれて広がっていった取り組みだ。「サクセスストーリーがあったので、それをみんなが見習ってほしい例です」と浦野さん。

村人たちに参加してもらってきた。「全体を通して見ると、住民たちの中に『まず、やってみよう』という気持ちが育まれました。こちらが一つきっかけを作ると、その広がり方がとても早いことにも驚きました。まじめな国民性が現れていると思いますし、それがきっかけで今後につながっていくと信じています」と期待を寄せる。

今年5月、プロジェクトの集大成としてバガン地域観光開発のためのマスタープランが完成し、周辺地域へモデルの紹介を兼ねたお披露目も行われた。それはバガンの観光を無理なく進める観光開発を支援するモデルとなっていると同時に、同様の文化遺産が多いミャンマーでは、他地域でも適用できるモデルとしての活用も期待されている。これからは、ミャンマーのいろいろな立場の人たちが力を合わせてバガン観光を推進していく局面へと移行する。名実ともに住民が誇れる観光地に育っていくはずだ。

観光開発はすべてのSDGsに貢献する!

SDGs達成に向けて観光はどういった役割を果たしているのか。現在JICAは、UNWTOとともに行ったプロジェクト研究の具体的なJICAプロジェクトとともに見てみよう。

貢献するゴール



地域・国 中東 イラン

JICAプロジェクト

ゲシュム島の「エコアイランド」構想による地域のための持続可能な開発計画策定プロジェクト (2015年11月～2018年11月)



●●●● エコツアーの開発、ファームツアーの催行などをパイロットプロジェクトとして実施し雇用を促進。

●●●● 重工業などの産業開発が進む一方で、ペルシャ湾最大のハラ・マングローブ林や特異な景観を持つジオパークといった豊かな観光資源を有するゲシュム島で、地元住民と自然資源の持続可能な開発を目的とする環境に配慮した水産振興、観光振興、固形廃棄物管理、下水排水管理に係るマスタープランを策定。

貢献するゴール



地域・国 アフリカ エチオピア

JICAプロジェクト

シメン国立公園および周辺地域における官民協働によるコミュニティ・ツーリズム開発プロジェクト (2011年11月～2016年2月)



●●●●● 住民に雇用が創出されるよう、対象地域における観光関連組織の能力向上・組織間連携強化、観光プロモーションにかかる開発・発掘能力向上、観光商品にかかる開発・発掘能力向上など、持続可能な観光開発の仕組みを官民協働で構築し、地域コミュニティが観光活動に参加する機会を増やした。
●●●●● シメン・コミュニティ・ツーリズム管理開発を行い、プランの官民協働による策定ほか、国立公園と保護区へのモデル提案。持続可能な観光の実現を目指した。

貢献するゴール



地域・国 欧州 ボスニア・ヘルツェゴビナ

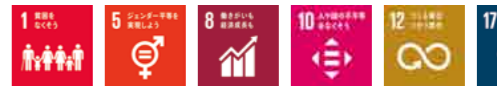
JICAプロジェクト

ヘルツェゴビナ国際観光コリドー・環境保全プロジェクト (2012年7月～2015年11月)



● ジェンダー情報を収集し、観光開発が男女双方の助けになるための工夫や、ジェンダー視点からの負の影響を検証し、計画に反映させた。
● 官民連携の持続可能な観光振興の取り組みを確立して、観光収入の増大、雇用機会の創出が図られた。
●●●●● 隣接するアドリア海沿岸の観光拠点と、ボスニア国内の観光拠点を繋ぐルート「国際観光コリドー」形成のための南ヘルツェゴビナ地域の歴史的街並み、地方部の山や湖、川の自然風景保全を含め、観光振興のアクションプラン策定。官民連携による観光振興の実施・モニタリング体制構築と、関与する官民のステークホルダーの活動能力向上に協力。

貢献するゴール



地域・国 中南米 ドミニカ共和国

JICAプロジェクト

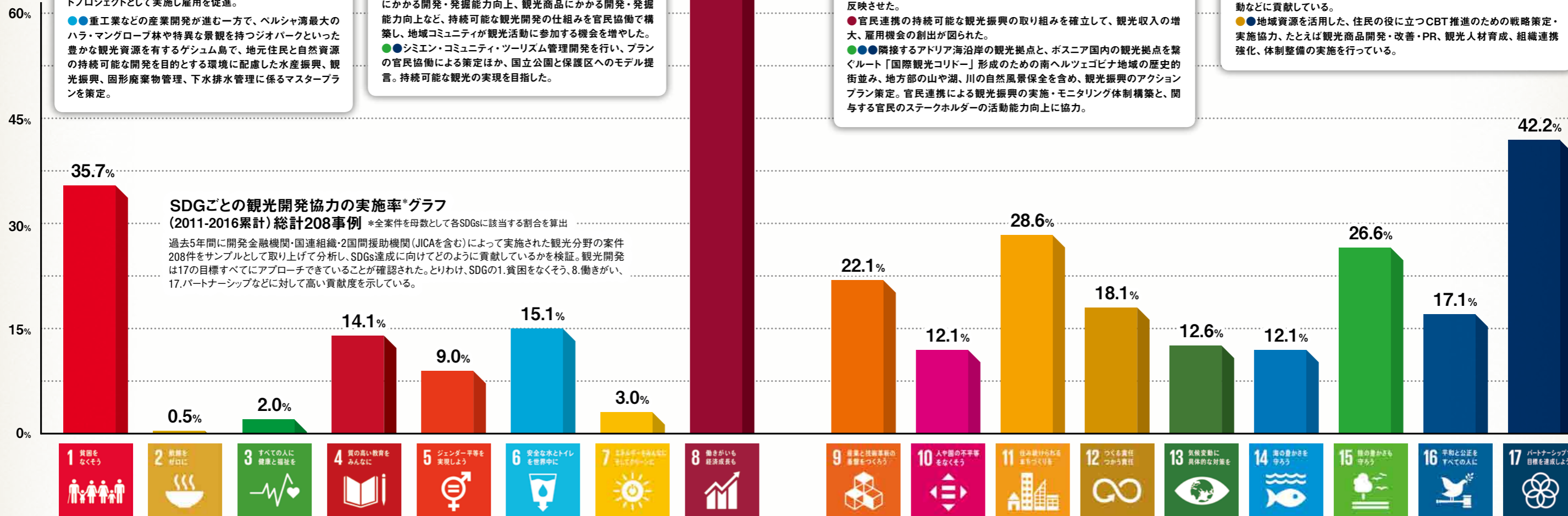
北部地域における持続可能なコミュニティを基礎とした観光開発(CBT)のためのメカニズム強化プロジェクト (2016年4月～2021年4月)



●●●●● 国内外からの観光客に向けた観光アトラクションを開発することにより、女性の活躍、雇用の促進、不平等の解消、責任ある行動などに貢献している。
●●●●● 地域資源を活用した、住民の役に立つCBT推進のための戦略策定・実施協力、たとえば観光商品開発・改善・PR、観光人材育成、組織連携強化、体制整備の実施を行っている。

208事例のうち
138例が
Goal8に貢献!

66.3%



SDGごとの観光開発協力の実施率*グラフ

(2011-2016累計) 総計208事例 *全案件を母数として各SDGsに該当する割合を算出

過去5年間に開発金融機関・国連組織・2国間援助機関(JICAを含む)によって実施された観光分野の案件208件をサンプルとして取り上げて分析し、SDGs達成に向けてどのように貢献しているかを検証。観光開発は17の目標すべてにアプローチできていることが確認された。とりわけ、SDGの1.貧困をなくそう、8.働きがい、17.パートナーシップなどに対して高い貢献度を示している。

観光機関)の総会では、観光開発が先の三つだけでなく、17のすべてのSDGsに関連する可能性があることが確認されました。

そこで、JICAとUNWTOは共同で、観光分野における国内外の援助機関による協力実績に基づく調査・分析を行い、各案件のSDGsへの貢献について整理したファイナルレポートの作成を進めています。その結果、観光開発はすべてのSDGs達成に向けて十分に貢献できることが認められ、上記の4例のようにひとつの案件がいくつかの開発目標に向けて横断的な効果をもたらすことがわかりました。観光は柔軟な協力ができる分野であることを世界に証明したのです。

また、JICAは同レポートで開発効果を十分に上げるための方策の提起も行っています。SDGsに対する適切なゴール設定や成果を測定する指標の設定、ステークホルダー(現地で観光開発の役割を担う企業や団体)の活用や連携モデルの促進、効果を高めるイノベーションの検討などで、指標についてはすでに策定され、「指標ツールキット」として世界に広められる予定です。JICAは引き続き、途上国の観光開発をよりよい方向に加速させていくことを目指します。

JICAは1970年代から途上国に対して、観光分野における開発計画の策定、人材育成、インフラ整備、自然遺産や文化遺産を活用した地域振興などの協力を実施してきました。近年は世界における観光客数の増加とともに、さらに支援のニーズが高まっています。一方で、2015年に国連で採択された持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals以下SDGs)では、観光が三つのSDGsのターゲット(達成のための具体的目標)に取り上げられています(SDG8、12、14)。観光開発は、有形・無形文化遺産や自然環境に配慮しながら、地域の雇用や収入を生み出し、各地域の持続可能な発展のための推進力となることが期待されています。

さらに、17年に中国で開催された第22回UNWTO(国連世界

JICA産業開発・公共政策部
浦野義人さん
観光開発協力とSDGsの関係性について解説してくれたのは浦野さん。ミャンマーの「地域観光開発のためのパイロットモデル構築プロジェクト」(p.14)をはじめ、これまで多くの観光案件に携わっている

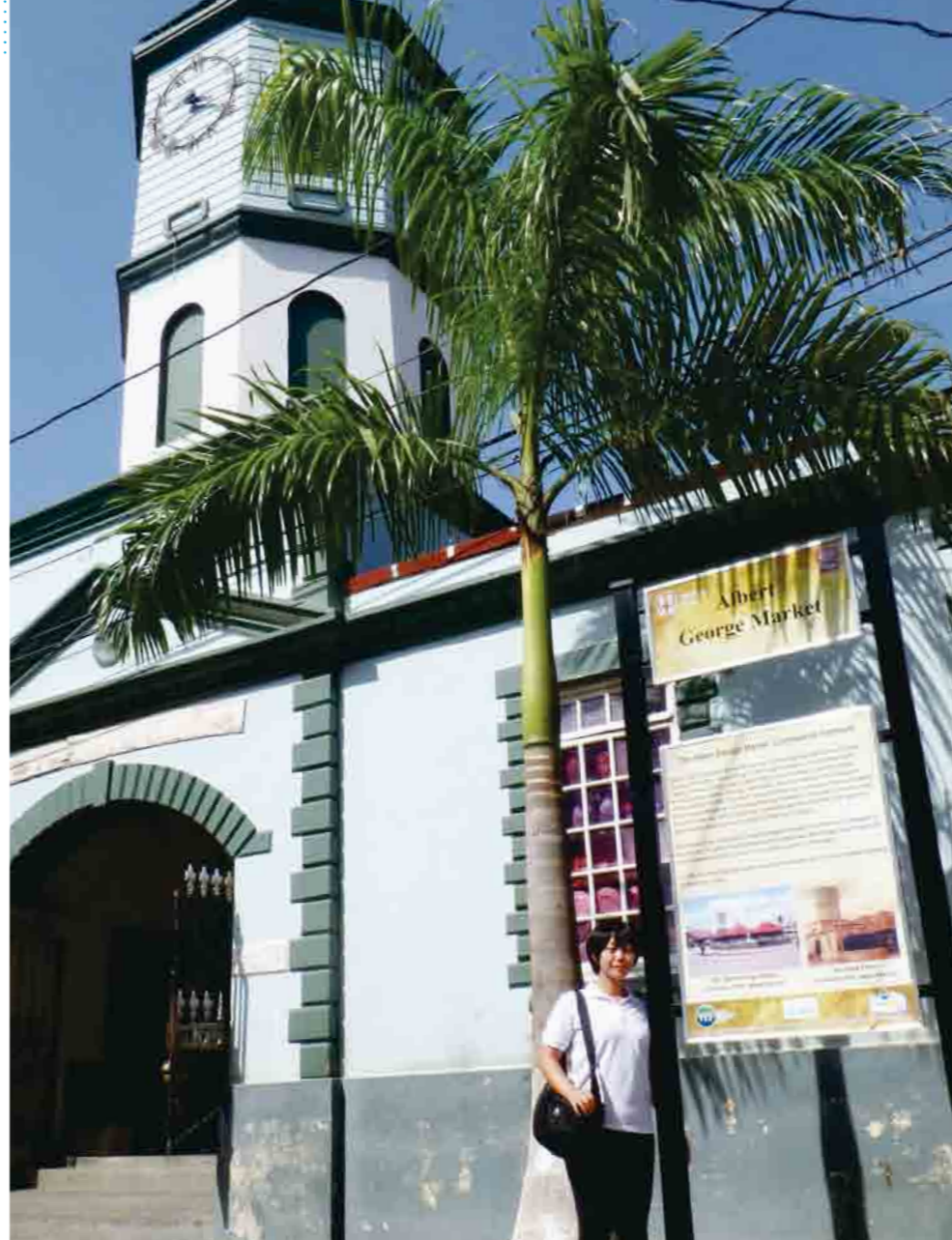


塚元夢野

from Jamaica



つかもとゆめの
1988年、新潟県生まれ。2011年、横浜国立大学卒業後、東日本旅客鉄道「JR東日本」入社。新潟県新潟駅で駅員、新潟県周辺全区域で車掌として勤務。鉄道の街を掲げて地域活性化に取り組んでいた新津では、鉄道まつりの開催、地域PR事業などに携わる。新潟県のアートイベント「大地の芸術祭」では、ボランティアのツアーガイドとしても活動。16年6月から18年6月まで青年海外協力隊の観光隊員としてジャマイカに派遣される。現在「JR東日本」に戻っている。



塚元さんの提案の場所に設置された観光案内板



観光案内板の設置場所を同僚と一緒に調査。思うように進まず悩んだ時期もあった



左:ファルマスに残る歴史的建造物の多くは整備されていない。右:欧米資本の会社がツアーを組み、ジャマイカ最大のクルーズ港となったファルマス

生活とは乖離してしましました。また、急激な観光開発に住民の意識や環境整備が追いついていませんでした。

塚元さんの配属先となった観光開発公社では、ファルマスを持続可能な観光の拠点とすることを目標に掲げていた。「文化遺産、建築遺産、人々の暮らしや習慣を観光開発に取り入れ、また市民一人一人が観光業で利益を得ている実感が持てるビジネスモデルづくりを目指し、遺産観光の促進、住民の意識啓発、観光収入の向上の三つの柱で活動しています」。

塚元さんが取り組んだ仕事のひとつが、街の観光ポイントの歴史や価値を紹介す

る案内板の設置だった。勇んで現地調査をし、現状と今後の展望を報告書にまとめたものの、結果は大学生のレポート扱い。とても落胆したそう。設置場所もころころと変わり、「私がいる意味ないじゃん、もう勝手にやってくれ」と、何度か思いました」と当時を振り返る。自分の存在意義を見いだせずに、悩む日々が続いた。

それでも最終的に塚元さんが提案した場所に観光案内板が設置され、「こっちはフォトジェニックだ」と言われたり、遺産エキスポの開催準備中、ブーシの配置

できることを広げていけばいい

地域を活性化する観光の在り方を考えた2年間

ビーチリゾートとして海外から多くの観光客が訪れるジャマイカにも、観光と地域振興が繋がらないという課題があった。観光隊員として派遣された塚元夢野さんは、2年間悩みながらもジャマイカの観光と真摯に向き合ってきた。

新潟県で鉄道会社の社員として取り組んだ観光による地域振興と、ボランティアとして活動したアートイベント「大地の芸術祭」のツアーガイド、この二つの経験から、「海外で観光による地域振興ができないか?」と考えていた塚元さん。調べて見つけたのが、会社に籍を残したまま参加できる青年海外協力隊だった。しかも観光分野での募集があり、地域活性化にも関わることがわかり、すぐに応募した。

当初の派遣予定国はエルサルバドルだったが、派遣の4か月前に治安悪化のため中止に。そこで急遽決まったのが、同じ時期での派遣が可能だったジャマイカだった。「ジャマイカのイメージは、レゲエ、ウサイン・ボルト、ブルームウンテンコーヒークらい。ジャマイカの位置とネット情報だけを確認し、派遣前訓練を終え、気づくと飛行機に乗ってしました」という塚元さんの言葉からは、当時のあわただしさと不安が感じられる。

自分の存在意義に悩む日々

2016年6月、塚元さんはジャマイカ北部にある港町ファルマスに赴任した。ファルマスはジャマイカの観光省が力を入れている地域で、14年には同国最大のクルーズ港となった。しかし一方で、街中では歴史的建造物の破損や路上ごみなど多くの課題があった。「ツアーの多くが欧米資本によるもので、地元住民の

場所を塚元さんがしっかりと把握していたところ、「ありがとう! あなたがサポートしてくれてよかった」と言われたり……。小さなことだが、「ああ、存在意義などとそんなに難しく考える必要なかったのかも。今はできることをやってその範囲を少しずつ広げていけばいいんだ」と気がついて、肩の荷がスツと下りた」という。

最後まで意欲的に技術の普及に努める

塚元さんは任期中最後の仕事として、ジャマイカの素材を使った草木染めの技術の普及に取り組んだ。きっかけは、一緒に活動していたファルマス工芸品組合の代表ジョーイ・ラシュさんの「天然素材を使った地元産品を観光客にも、もっと広めたい」というひとこと。塚元さんがコーディネーターとなり、ジャマイカ



他の地域で草木染めを教えた環境教育隊員を指導者に、商品開発を担当していたシニアボランティアを助言者としてワークショップとトレーニングを企画した。「任期終了まで3か月を切っただけで、任期中にここまで形になるかはわかりませんでした。配属先のクラフト部門と連携し、将来につながる活動になっただけ」と最後まで意欲をみせた。「ジャマイカのような観光国では、人の暮らしの多くの領域に観光産業が関係しています。観光税で整備された地域もたくさんあります。地域住民に観光が自分の生活に役立っている実感してもらい、持続可能な方法で開発を進めていくことが大切だと、あらためて感じました。JR東日本に戻ってから、この2年間の経験を活かして日本で過疎地域と観光客をつなぐ地域を活性化することにに関わり続けていきたいです」



上:最後の仕事として草木染めのトレーニングに取り組んだ
下:こんな染物が完成! みんな紋りの柄がきれいに出た



地元の生徒に向けた野外体験教育研修。金沢大学国際担当理事・副学長(当時)も現地を訪れ、参加した



上:コパルティナスでの第三国研修。他国の取り組みから学ぶことは多い/右:ティカルに関わる複数の関係者が同じ研修に取り組み、さらにより関係が築かれた



上:マヤ地域の熱帯雨林に棲む動物の絵で壁面を彩るワークショップ。景観も美しくなると同時に、子どもたちがティカル国立公園の動物相について知る機会となる/下:コミュニティ緑化プログラムでは、住民に環境を守る意義を理解してもらい植樹を行った



フィールドワークとしてティカルを訪れた金沢大学の学生たち。子どもたちのワークショップのお手伝いをした

文化資源学で取り組む ティカルの観光開発

金沢大学国際文化資源学研究センターは、2014年からグアテマラ共和国でJICA草の根技術協力として観光開発を行ってきた。17年からは次のプロジェクトが始まり、長いスパンでの支援となっている。

文●久島玲子(編集部)



金沢大学 国際文化資源学研究センター

PLAYER'S PROFILE

2011年2月、金沢大学人間社会研究域付属の研究施設として発足。世界各地で変化を余儀なくされている有形・無形の文化遺産を「文化資源」ととらえ、総合的・多角的な研究・保護・活用法の開発を行う。「形態文化資源部門」「伝承文化資源部門」「文化資源情報部門」の3部門で構成され、相互が有機的に連携して研究を進めている。世界的な研究拠点をめざすと同時に、学生の教育や若手研究者の養成にも力を注いでいる。

■石川県金沢市角間町 ■TEL:076-264-5785 ■http://crs.w3.kanazawa-u.ac.jp/



遺跡の説明をする中村さん

「1970年代頃、考古学の分野にパブリック・アーケオロジ、直訳すれば「公共的な考古学」という考え方が生まれまます。考古学を専門家だけのものとするのではなく、社会の中での考古学の役割を考えていくものです。金沢大学国際文化資源学研究センターの形態文化資源部門ではその考え方に基づき、遺跡などがある地域やコミュニティと大学が連携し、研究の一翼を担ってもらい、さらには地域の観光資源として文化遺産を活用することなどを研究しています」

文化資源学についてそう説明してくれたのは同センター教授の中村誠一さん。2014年6月から17年3月まで金沢大学が取り組んできたJICAの草の根技術協力事業「世界複合遺産『ティカル国立公園』の保存と活用を通じた住民の生活向上支援プロジェクト」では、文化資源学の研究の一環としてティカルの観光開発に協力してきた。中村さんはマヤ遺跡の専門家として、このプロジェクトの中心となって進めている。

金沢大学としても幅広く協力

ティカル国立公園は、マヤ文明の中心都市の遺跡とその周囲に広がる約570平方キロメートルの豊かな熱帯雨林からなっていて、世界複合遺産に登録されている。グアテマラ随一の観光地で、年間20万人を超える観光客が訪れるが、そのほとんどが遺跡観光をするだけで、近隣の村が経済的に潤うことはなかった。また、国立公園内での地元の雇用も少なく、

生活のために不法伐採や密猟、盗掘に手を染める住民も少なくなかったそうだ。そこで、ティカルでの観光業が生活向上につながるプログラムを遺跡に近い三つの集落で実施した。ガイドの養成、木製品などのお土産品作り、また女性を対象とした遺跡からの出土物を修復する技術の研修、地元の小学生に向けた遺跡学習などを通して、遺跡に対する住民の意識に少しずつ変化が生まれてきている。集落を素通りしていた観光バスに停まってもらったために、共同組合を組織して道路沿いにカフェテリアを作りはじめた女性グループも生まれている。

他地域での 取り組みを学び ティカルに活かす

その成果を受けて、2017年6月からスタートしたのが「ティカル国立公園への観光回廊における人材育成と組織化支援プロジェクト」だ。「今はプロジェクト終了後を見据えて、観光業のリーダーとなる人材の育成や取り組みの組織化などを主眼にしています。対象の集落をさらに三つ増やし、より広いエリアでの観光開発を進めています」

隣国ホンジュラスのマヤ遺跡、コパルティナスで行われた第三国研修には、ティカル周辺集落の代表者、市役所の担当者、国立公園の代表者など全部で8人が参加し、現地での取り組みを見学しながら、ティカルで活かすアクションプランを作成した。「抱えている課題も似て

「私たちは考古学をベースに観光開発に取り組んでいますが、集落の中で仕事を作っていく、魅力的な地域にしていくといった、町づくりの視点も必要になってきます。そんなときには、金沢大学のネットワークを活用できるのも私たちの強みだと思っています」

ティカルには金沢大学のリエゾン・オフィスがあり、日本やグアテマラの協定校から学生がフィールドワークに訪れる。学生たちにとっても、異文化体験や村の人たちと協働できる海外インターンシップの場であるティカルは、またとない教育の現場になっている。

中村さんたち金沢大学のプロジェクトは、ティカルの人たちにも、日本やグアテマラの研究者や学生にもたくさんのおもてなししながら、これからも継続していく。

学ぶことで意識が変わっていく

エコツーリズムとは、その土地にある自然や文化を活かし、環境を保全しながら地域の発展を大事にする観光のあり方。参加者は未知の自然や文化に触れると同時に、その背後にある歴史や保全の必要性など、一般的な観光では体験できない学びを得ることができる。

「エコツアー開発では、参加者だけでなく地元の人たちも学ぶことが多いです」と言うのは、日本のエコツーリズムの草分け的な存在の新谷雅徳さん。ハワイ島や滋賀県、富士山でエコツーリズム開発を行い、2011年からJICAの専門家として海外のエコツーリズム開発にも関わってきた。

新谷さんが最も実感しているのは、地域の人たちが自分たちの自然や文化の価値にあらためて気づき、大きく意識が変わるということ。たとえば、JICA草の根技術協力として京都大学の研究チームと共同で取り組んでいる中央アフリカのガボンにあるムカラバ・ドウドウ国立公園のプロジェクト。ガイドの研修などを通して、あらためて森のこと、ゴリラのこと、自分たちの地域のことを考え、主体的に取り組む地域の人が増えてきた。国外からのエコツアー参加者に「素晴らしい森の話をしてください」と感謝され、ガイド自身のモチベーションも上がっている。

一方、イランでのJICAの「アンザリ湿原環境管理プロジェクト」には日本工営のコンサルタントチームの一員として携わり、エコツーリズムセンターとなる伝統家屋を村人と建設し、女性ガイドの教育に力を入れている。お土産になる工芸品作りの指導、カヤックのガイド研修も行った。「女性たちは社会的にも経済的にも厳しい環境に置かれていますが、エコツアーが仕事になり、彼女たちが笑顔になることを目指しています」。センターでは女性たちが手作りの工芸品を販売し、お茶や食事を出し、カヤックのガイドを行う。ツアー客にとっても好評で、休日には500人以上が訪れるようになった。

富士宮でエコツアーのよいモデルを体験

海外での経験を積むうちに、世界中から「地域の人がいっしょに関わるエコツアーのモデルを見たい」という声が新谷さんに届くようになった。そこで2年前から、外国人観光客をターゲットにしたインバウンド・エコツアーに富士宮市で取り組んでいる。

「富士山には目に見える美しさだけでなく、その背後には見えないけれども山岳信仰、湧水、食といったさまざまな物語があります。それらの背景に誇りを持って仕事をしている地元の人たちと一緒に、富士山の自然、文化、歴史を体験してもらえたらいいです」

富士登山を楽しんだり、着物を着て浅間大社を訪れたり、和菓子作りを体験し

世界とつながる教室

学びの場としてのエコツーリズム

海外を飛び回ってエコツーリズムの開発支援を行いながら、国内では静岡県富士宮市でのインバウンドエコツーリズムを実践している新谷雅徳さん。エコツーリズムはそれに参加する人だけではなく、多くの人たちの学びの場となっているという。

文・久島玲子(編集部)

ムカラバドウドウ国立公園(ガボン)



実際の観光客にお願いして、テストツアーをさせてもらっている様子。地元のガイドが自信に満ち溢れている

アンザリ湿原(イラン)



ツアーの参加者からコメントを受ける村の女性たち

富士山インバウンド・エコツアー(日本)



富士山周辺では、地域の人たちの力を得て、自然、文化、歴史と多様な切り口でエコツアーを実施している <https://mtfujiecotours.com/>



マウンテンバイクで富士山麓の里山を巡り、地元の人々と触れ合う



しんたにまさのり
1968年、兵庫県生まれ。静岡大学卒業。フロリダ工科大学大学院環境学科環境資源マネジメント科修了。エコツーリズムのパイオニアのひとりとして、世界各国でエコツーリズム開発とそれに関わる人材育成に携わる。2008年、エコジック設立。10か国以上でエコツーリズム開発を支援している。



着物体験ができるツアーには、市内の呉服屋さんが協力してくれた



地元のお蕎麦屋さんでは、おかあさんが打った蕎麦と地元で採れた野菜の天ぷらをいただいた

たり、地元のおばあちゃんに手打ちそばの作り方を教えてもらったり……。地元の呉服屋さん、和菓子屋さん、文房具屋さん、料理屋さんの協力があって実現しているツアーだ。「海外からのお客様さんが、地元の人たちの仕事を楽しくしてくれるので、もっとこうしたらよくなるのでは、といういろいろな地域の人とみんなで工夫しています」。

このツアーには、中南米やイランなどの研修生も参加していて、「日本でエコツアーに取組んでいる地元の人と会えてよかった」「地域の素晴らしい景色を学べた」「(帰国して) 地域の人をより広く巻き込んでみたい」という声を聞くことができた。ただ講義をするのではなく、実際の富士山での経験をともに、ガイドの仕方、地域でのエコツアーの仕組の作り方、紹介ビデオやウェブサイトの作り方、アンケートの取り方など、研修生が期待する具体的なノウハウも提供できるよう進めている。

「エコツアーは地域ごとにプログラムが必要ですが、考え方は同じ。地域の人とともに行うエコツアーとはどういうものなのか、その学びの場として、富士宮をよいモデルにしていきたいと思っています」。

身近にある自然や文化などの資源の保全が、現在そして将来において自分たちのメリットにつながることを知った人たちは、自らその資源を守るはず。エコツアーで学ぶのは、参加者だけではなく、地域の人たちが、あらためて自分たちの自然や文化の価値に気づくことにこそ、より大きな意味がある。



伝統家屋を再現したエコツーリズムセンター。運営に携わる女性たちが並ぶ



上:エコツアーのプログラムは自分たちで作る。だから大切にする/左:国立公園内に生息するニシローランドゴリラ

01 太平洋島嶼国と日本の協力が培う信頼関係



「第8回太平洋・島サミット」が5月18日、19日に福島県いわき市で開催されました。太平洋島嶼国が直面するさまざまな問題について、同じ島国である日本と意見交換を行い、協力関係をつくり上げていくことを目的とした首脳会議です。

ミクロネシア、ポリネシア、メラネシアに大分される島嶼国は「国土が狭い上に分散し、電気や水道などの社会サービスが行き渡らない」「国際市場から遠く、産業が育ちにくい」「自然災害や気候変動に対して脆弱」といった共通の課題を抱えています。JICAはこれらの課題解決と島嶼国との連携強化を目指して、長年さまざまな分野で協力を続けています。

たとえば、電力分野の協力は1990年代のディーゼル発電設備の整備から始まりました。2009年以降は、既存の電力系統に太陽光発電を連係させる取り組みを進めており、現在は5か国を対象にハイブリッド発電の普及を進めています。そこで蓄積された知見は日本の島嶼型エネルギー技術の向上にも活用され、JICAの担当者は「日本と同じ課題を抱える国々とおたがいに学び合っています」と語ります。



トンガに導入された太陽光発電システム

*太陽電池や風力発電機、水力発電機など異なる種類の発電機を組み合わせた発電システム

課題解決を担う人材の育成も急がれています。JICAは16年から島嶼国の若手人材を対象とした留学制度「太平洋島嶼国リーダー教育支援プログラム」の実施を始め、日本の大学での修士号取得の支援や省庁・自治体での実務研修を行っています。現在約80人がこのプログラムで学んでおり、3年間で約100人が日本に留学します。「参加者たちは、日本で身につけた専門知識とネットワークを母国での取り組みに役立てていきます」と、JICAとともに留学生をサポートするNPOの担当者は述べます。

JICAは今後も、ボランティアや民間企業とも幅広く連携し、島嶼国の課題解決に取り組んでいきます。

03 エボラ出血熱の流行拡大防止に日本の技術が貢献

コンゴ民主共和国でふたたび発生したエボラ出血熱の流行に対処するため、JICAは6月7日までに同国国立生物医学研究所（INRB）にバイク5台、発電機1台、エボラウイルス迅速診断キット1500組などを提供しました。これらの機材は最前線で活動する医療従事者の移動や簡易検査施設の電力供給、患者の診断に使用されます。

同国の赤道州では、流行が発表された5月8日から6月14日までに66の症例が報告され、うち38例は陽性が確定し



迅速診断キット引き渡しの様子。INRBエンベ所長とJICAコンゴ民主共和国事務所柴田所長

教授の高田礼人さんとデンカ生研株式会社との共同研究を通じて開発されたものです。特別な器具を必要とせず約15分で検査結果が判明するため、感染患者の診断に大きな役割を果たしています。

02 女性の起業やビジネスを促進。30億ドルの資金動員を目指す

6月9日、JICAはG7の開発金融機関とともに「G7 2X（ツイエックス）チャレンジ」女性のためのファイナンスイニシアティブ」発足の共同宣言を発表しました。G7各国の開発金融機関と共同で女性のための金融支援を強化し、2020年までに30億ドルの資金動員を目指します。

女性が経済活動に参加することは世界の繁栄と安定のために重要ですが、現状ではさまざまな障害があります。たとえば、新興市場の中小企業に占める女性の割合は3割程度にとどまっております。さらには、そのうちの7割は融資の担保となる土地や家の所有権を持たないため、正規の金融サービスへのアクセスが限られています。結果として、女性が経営する中小企業は、世界全体で3200億ドルもの資金不足に直面しているとの試算があります。こうした現状を変えるため、女性のビジネスリーダーの育成や労働市場への参入促進といった経済的な支援が求められています。

今回の「イニシアティブ」立ち上げにより、G7各国の開発金融機関は自らの資金提供を呼び水に民間の投資を促し、ジェンダー平等や女性の経済社会参加につながる事業を後押しします。JICAは各国の開発金融機関とともに、途上国の女性たちの活躍に向けた支援をいっそう強化していきます。



*写真はイメージです

JICA STAFF

From Headquarters

—信頼で世界をつなぐ—
スタッフインタビュー

地域の“思い”が形になる 観光開発を目指したい



久保 信也
産業開発・公共政策部
民間セクターグループ 第二チーム（取材当時）
くぼしんや
1991年生まれ、東京都出身。大学で経済学を学んだ後、イギリスの大学院で開発学を学ぶ。修士論文のテーマは「インドにおける経済自由化と国内労働力移動の関係性」。2016年、JICAに入構。観光分野を中心に、途上国の産業振興に関するさまざまな業務に携わる。

開発の失敗事例がきっかけに
大学時代にある途上国援助の事例を知って衝撃を受けました。ある民間団体が電気の通っていない地域に電化製品を寄贈したという話で、その製品は使われなかったり、捨てられてしまったというのです。なぜそのようなことが起こったのか、何が現地の人々の生活改善につながる支援なのか——貧困問題や途上国支援について根本的に考えたと思います。イギリスの大学院に進み開発学を専攻しました。

大学院に在籍していた当時アラブ・アフリカ諸国で広がった民主化の動きを背景に、迫害や弾圧を逃れてEU諸国に流入する人々が急増していました。ベルギーの難民センターでボランティアに参加した私は、稼いでいく手段のない難民の厳しい現実を知られました。センターでは職業訓練や言葉の教育が行われていたのですが、かならずしも仕事につながるわけではありませんでした。雇用の受け皿が限られていること、地域の労働者と雇用機会を争わなくてはならないこと、女性が外で働くことが一般的ではない文化的な背景など、さまざまな要因が難民の就労を困難にしていました。彼らの切実な状況を目にして、産業の振興や中小企業を盛り上

げる国際協力に携わりたいという気持ちが強くなりました。開発学を志した目的でもある効果的な支援を実現していくため、JICAへの入構を決めました。入構後、海外OJTでモザンビークに派遣されました。現地では無秩序な森林伐採による土壌の劣化が深刻化しており、日本は森林保全の技術協力をしています。私はそこで初めて協力事業の現場を学びました。途上国側の担当機関の能力向上は技術協力事業の重要な目標ですが、すべての人たちにその認識が共有されているわけではありません。先方の関係者の中には、状況の深刻さを理解していない方や、「日本がやるプロジェクトだから」と、当事者意識の低い方もいました。専門家の方はそのような認識の違いが問題になるたびに、くり返しプロジェクトの意義を伝えて、先方の理解を得ようと努めています。けっして上から強制するような物言いはせず、「あなたの能力向上のためもあるんだから一緒にやらないか」と、粘り強く語りかけるその忍耐強い姿勢に、大いに触発されました。

「らしさ」を磨いて地域振興
入構前の希望が叶い、現在は中小企業や地場産業の振興を後押しする案件に携わっています。

入構前は希望が叶い、現在は中小企業や地場産業の振興を後押しする案件に携わっています。

入構前は希望が叶い、現在は中小企業や地場産業の振興を後押しする案件に携わっています。



カカオ生産者より収穫工程の説明を受ける久保さん(右から2人目)。カカオ製品の購入を促すアクティビティの一つ

現地の人々に息づく文化を知る、よききっかけになると思います。ときに、オリジナリティのある商品を作りたいという人々の強い思いは裏目に出てしまうこともあります。たとえば、キャットサバ加工場の体験型ツアーでは、自分たちが頑張った製品を作っていることを知ってほしいという気持ちから、見せる必要のない製造過程までコースに入っていました。取り組みにビジネス目線の客観的なアドバイスを与える、現地観光省の能力向上も課題です。こういった観光開発の取り組みがさらに前進するよう、専門家やドミニカ共和国の政府機関に、民間セクターとの積極的な連携や国を挙げたプロモーションなどを提案することは、私の大切な役割です。

なんといっても地元の人々が頑張っています。観光客を呼びたいという彼らの気持が、一つでも多く商品として形になり、たくさんの人々に現地を訪れてもらい、その魅力を感じてほしい。私もJICAの職員として、現地の取り組みと雇用創出に良いインプットが与えられるよう、努力を続けていきたいと思っています。



日本での研修に参加したドミニカ共和国の政府職員らと久保さん(後列右から2人目)。能登半島をめぐり地域に根ざした取り組みの実例を学んだ

地球の広報旅人・エッセイスト

たかのてるこ

生きてし生けるもの、 すべての幸せを 祈る人たち



たかのてるこ
世界65か国を駆ける旅人。神秘的なチベット体験を綴った『ダライ・ラマに恋して』、『ガンジス河でバタフライ』、『純情ヨーロッパ』など、著書多数。全国での講演、メディア出演、大学講師など、幅広く活動中。
www.takanoteruko.com



『生きるって、なに?』
たかのてるこ著
540円(税込)
ジュンク堂&丸善書店、
送料無料でネット書店
[honto]で発売中



上から:仏教グッズ、「マニ車」を回して祈るおっちゃん。/現地でなかよくなり、家に泊めてもらったなかよし家族。/「五体投地」という礼法で、生きとし生けるもの、すべての幸せを祈る人たち。/ダライ・ラマの法話を聞きに来たチベットのお坊さん。みんないい笑顔!



仲良くなったチヨズン&息子さん。家におじゃますると、暖炉に薪をくべて、家族みんなで団欒。時間がゆるやかに流れるラダック

どうってことないわよ」とチヨズンはにっこり。家族を何よりも大事にしているラダックの人たちと過ごしていると、日本では失われつつある大家族のすばらしさを感じずにはいられなかった。

ラダックには本当にモノがなく、肉も魚も野菜の種類も少なく、高地なので空気も薄く酸素も足りないのだが、人と人のつながりだけはめちゃめちゃ濃い。そして、すべてがナイナイづくしでも、自分たちの口に入れる物は、食べ物も薬もすべて手作り。そんな彼らの暮らしに寄り添っていると、心の底から安らいでいる自分がいた。

が少ないけれど、あるものを大事にして、家族や友だちと過ごす時間がはるかに人間らしく生きているように思えてならなかった。

あるとき、お寺巡り中に出会った現地の人たちに「何を祈ったの?」と聞くと、みな口をそろえて「もちろん、生きとし生けるもの、すべての幸せだよ」と言うので衝撃を受けてしまった。仏教のベースである輪廻転生を信じる彼らは、「人」限定で幸せを祈ることがなく、自分自身のお願ひごともしないというのだ。

現地で意気投合した学校の先生、カルマに、「私も、『大好きなダライ・



旅の最後、面会できた憧れのダライ・ラマと。その物腰の柔らかさ、純真なほほえみ。お話をお聞きすると、自分の小ささが恥ずかしくなくなるほど!

ラマに会えますように♡』とお祈りした後、世界の平和も祈ってるんだけどね」と言うと、カルマが言う。「自分の願ひごとをする必要はないよ。世界の平和には、君のことも含まれてるんだ。世界が平和になれば、君も自動的に幸せになるのに、どうして自分ひとりだけ幸せになろうとするんだい? 君の幸せと世界中の人の幸せはつながっているんだよ」と言われ、目からウロコがぼたぼた落ちる。

私がひとりでは幸せを感じることでできないように、他の人だって自分ひとりでは幸せを感じることはできない。私の幸せは、他の人の幸せとも密接につながってる! と腹の底から思ったのだ。

世界をひとり旅することは、私にとって、そのときどきの夢を叶えてくれる「魔法のランプ」のような存在だと思ってしまう。

この世で一番おっかない国だと思っていたインドを旅して、ガンジス河でバタフライするというアホな夢を叶えたり、ラテンな生き方にあやかりたいと旅したキューバでは、最高に愉快なアミーゴ(友だち)もできた。

日常という長期スパンではむずかしくとも、短期決戦の旅先では目的に対して気持ちがまっしぐらだから、そのとき「自分が欲しているもの」が手に入る。スケジュールが決まっている大人数のツアーでは現地での出合いが限られてしまうものの、無限大に自由なひとり旅では、自分の求めることが現実になるのだ。

* * *

ダライ・ラマに憧れて、リトル・チベットと称される北インドのチベット文化圏「ラダック」を旅したときのこと。

空港で働いていたおねえちゃん、チヨズンとなかよくなり、彼女の親戚が経営する民宿に泊まったのが縁で、家にお呼ばれして夕食をいただくこともしばしば。「急に夕食をこちそうになってもいいの!?!」大家族だから、ひとりふたり増えても、

その後、私は自分の願ひごとをするのをやめ、生きとし生けるもの、幸せを祈るようになった。すると、現地で、前世を覚えている少女と巡り会い、その少女の前世の家族(?!)にも会えて、旅の最後には北インドのダラムサラで、ダライ・ラマと面会できるという奇跡まで起きたのだ。

チベット文化圏を旅して以来、彼らのいてない暮らしに影響され、食事はなるべく手作りするようにになり、友だちや家族と過ごす時間を大事にするようになった。

会社を辞めて独立した後、大学で教えるようになり、奨学金の返済に苦しむ教員から「生きる意味が分からない」と打ち明けられ、彼の心に前向きな気持ちが湧いてくるような文章が書きたいと思った私は、「生きるって、なに?」という本を自費出版することにした。大ヒットしたら、返済不要の奨学金を作り、教育にお金のかからない世界を作りたいたいという大きな夢に向かって。毎年、正月になると、大勢の人が初詣に行くけれど、だれもが自分の願ひごとではなく、生きとし生けるもののために祈れるようになればいいなと思う。世界中の人がそう祈ることができるとき、世界に平和が訪れると思うからだ。

Q3 海外で最近注目の観光開発は？



アルゼンチン・メンドーサ州で行われているワインツーリズムの様子。奥にはブドウ畑が広がっている(写真提供: UNWTO)

A3 UNWTOでは、スノーカルチャーツーリズムだけではなく、ガストロノミーツーリズム(地域の食文化を知り、体験する観光)などにも力を入れています。今、注目されているのがアルゼンチンのワインツーリズムです。

アルゼンチンはワイン新興国ですが、その生産量は世界5位で、品質の高さでも世界中の人を魅了しています。一方で、地元経済には必ずしもその恩恵が行き届いていませんでした。そうした土地の魅力を知ってもらうことで経済を活性化させようと、ブドウ畑が広がるアコンカグア山麓のメンドーサ州で、ワインツーリズムを経済活性化の柱とする取り組みが行われました。観光客がワイナリーを巡りテイスティングを楽しむだけで

なく、ワインを中心としたメンドーサの歴史や文化を「ストーリー」としてまるごと体験できるようにしたのです。地元料理や特産品のアンズやナッツと一緒にワインを味わうこと、ワインに根ざした地元文化を紹介する博物館やギャラリーの見学、料理教室の開催、ブドウ摘みなど、地元を体験できるプラスアルファのアクティビティが企画されました。観光客にワインを味わってもらっただけでなく、メンドーサの「ストーリー」を体験してもらうことで、さまざまな分野の雇用が増え、地域経済の活性化につながりました。こうした持続可能な観光は、どんな国や地域でも、これからの観光の主流になっていくと感じています。

POINT

- 1 国連世界観光機関(UNWTO)は、持続可能な観光を推進している。
- 2 UNWTOには、国や地域だけでなく、UNWTOが目指す目的、方向性に賛同する民間企業、学術機関なども参加している。
- 3 地域の自然、歴史、文化、食などを尊重し、地元も恩恵を受ける観光の発展を目指している。

Q1 「国連世界観光機関(UNWTO)」ってなんですか？

A1 UNWTOは、持続可能な観光を通じて世界中の人々がおたがいを理解し合い、平和や繁栄に寄与することを目的とした国連専門機関です。1975年に発足し、活動の広がりに伴い2003年に国連の専門機関となりました。本部はスペインのマドリッドに置かれています。

17年9月時点では、158か国、6地域、オブザーバー2地域が加盟していて、賛助加盟員として民間企業や学術機関な

ども加盟できることが特徴です。日本からは観光関係団体、旅行会社、航空会社、大学など17団体が参加しています。

日本にはUNWTO唯一の地域事務所である駐日事務所(本部:奈良、支部:東京)が設置されていて、アジア・太平洋地域におけるUNWTO本部の活動を支援しています。駐日事務所、賛助加盟員と観光庁・外務省との産学官が連携してUNWTOの活動を推進しています。

日本では外国人旅行者の大幅な増加により観光業に注目が集まっていますが、観光業に期待しているのは途上国も同じです。自国の歴史や自然、文化、遺産などを活用できる観光業は、目立った産業がなく資源や人材も少ない国にとっても、経済活性化の手段として有効と考えられています。

Q2 日本ではどんな取り組みを行っていますか？

A2 UNWTOが進める持続可能な観光は、ただ単に観光客を誘致するというものではありません。地域の人たちが担い手となり、地域経済や自然、文化の持続を目標とする観光のあり方です。

日本国内でこの考え方を知らうため、国連が定めた「持続可能な国際観光年」であった2017年には、ハローキティが国際年の特別大使に就任し、国際年のメッセージ「Travel. Enjoy. Respect. = 旅して、楽しんで、感謝する」をオリジナル映像で発信しました。加えて、伝統ある絵画展の二科展デザイン部では「持続可能な観光国際年」をテーマとしたポスター展を開催し、好評

を博しました。

持続可能な観光の考え方に基づき日本で行われている観光開発の一つが、スノーカルチャーツーリズムです。雪を観光資源ととらえ、雪国ならではの文化や食の魅力を発信・体験できるプログラムの開発に取り組んでいます。今年2月には山形県で「雪と文化の世界観光会議」が開かれ、およそ30の国と地域から約300人が参加しました。新しい観光資源の発掘、雪国文化の再発見と同時に、相対的に外国人観光客が少ない東北地方への観光客誘致にもつながると期待されています。



第102回二科展デザイン部外務大臣賞中山未晴(写真提供:一般社団法人二科会デザイン部)



UNWTOリファイ前事務局長(前列中央)は、「雪と文化の世界観光会議」の前年にも山形県を訪問。酒田市の相馬楼で日本文化を体験し、東北地方の観光振興をアピールした(写真提供:ANA総合研究所)

Message from Jordan



ペトラ遺跡の魅力をアップ

ローマ時代やオスマン時代の文化遺産、死海をはじめとする自然景観に恵まれたヨルダンでは、観光が外貨獲得の主要産業であり、雇用の創出源となっています。この国が誇る世界遺産の一つ、ペトラ遺跡には年間60万人以上の観光客が訪れています。しかし、発掘された遺物を適切な形で保存・展示し、観光客や地域住民に遺跡を体系的に紹介する施設が整備されていません。また、遺跡以外に観光客をひきつける地域環境の整備が不十分な点も課題となっています。

そこで日本は、一般文化無償資金協力「ペトラ博物館建設計画」により、同遺跡の玄関口に遺跡の博物館を建設する支援を行っています。ま

た、技術協力「コミュニティ重視型のペトラ地域観光開発プロジェクト」により、同博物館の運営や観光サイトマップの作成をはじめとする、ペトラ地域の総合的な開発に携わる人材育成を目的としたソフト面での支援を実施しています。

この二つのプロジェクトを通じて、同遺跡を中心とした文化遺産の適切な保存・活用と地域全体の観光開発の実現、同地域の持続的かつ自立的な発展に向けて協力しています。

このように、日本によるペトラ地域での観光開発協力は、文化遺産保護などのために整備された施設が、観光促進のためにも十分に活用されるようにソフト面での支援を併せて実施することで、真

に効果的な協力となることを目指しています。(在ヨルダン日本国大使館 二等書記官 村田直也)



技術協力プロジェクトの一環として、ペトラ遺跡のビジターセンターで観光客や地元の子供たちにもナバタイ土器の文様を描く体験教室を開催

テーマ
持続可能な観光



ココシリ

「ここが知りたい」。国際協力に関する政策を外務省の担当者が分かりやすく解説します。

外務省国際協力局専門機関室
外交実務研究員

内山 訓嘉

うちやまくによし
2011年、神戸市役所に入庁。西区保健福祉部保護課で保健福祉業務を担当。13年、参議院事務局に移り、議事部議案課での勤務を経て、16年7月より外務省に出向。現在、観光、道路交通、海上交通などを担当。

真珠の恵みを 明日への布石に



キバレ・フォレスト国立公園のチンパンジー



首都カンパラのナカセロ市場。庶民の台所



ごちそうになったピラウ。
ネリカ米の栽培にも取り組みたいと意欲的だ



ブウィンディ原生国立公園のポーターの仕事。トレッキングではツアーの荷物を担ぎ、坂道では手を引き、川を渡る際は川に入り、ツアーに肩を貸したりする。この日は前日の雨で橋が使えず、即席の橋を渡った



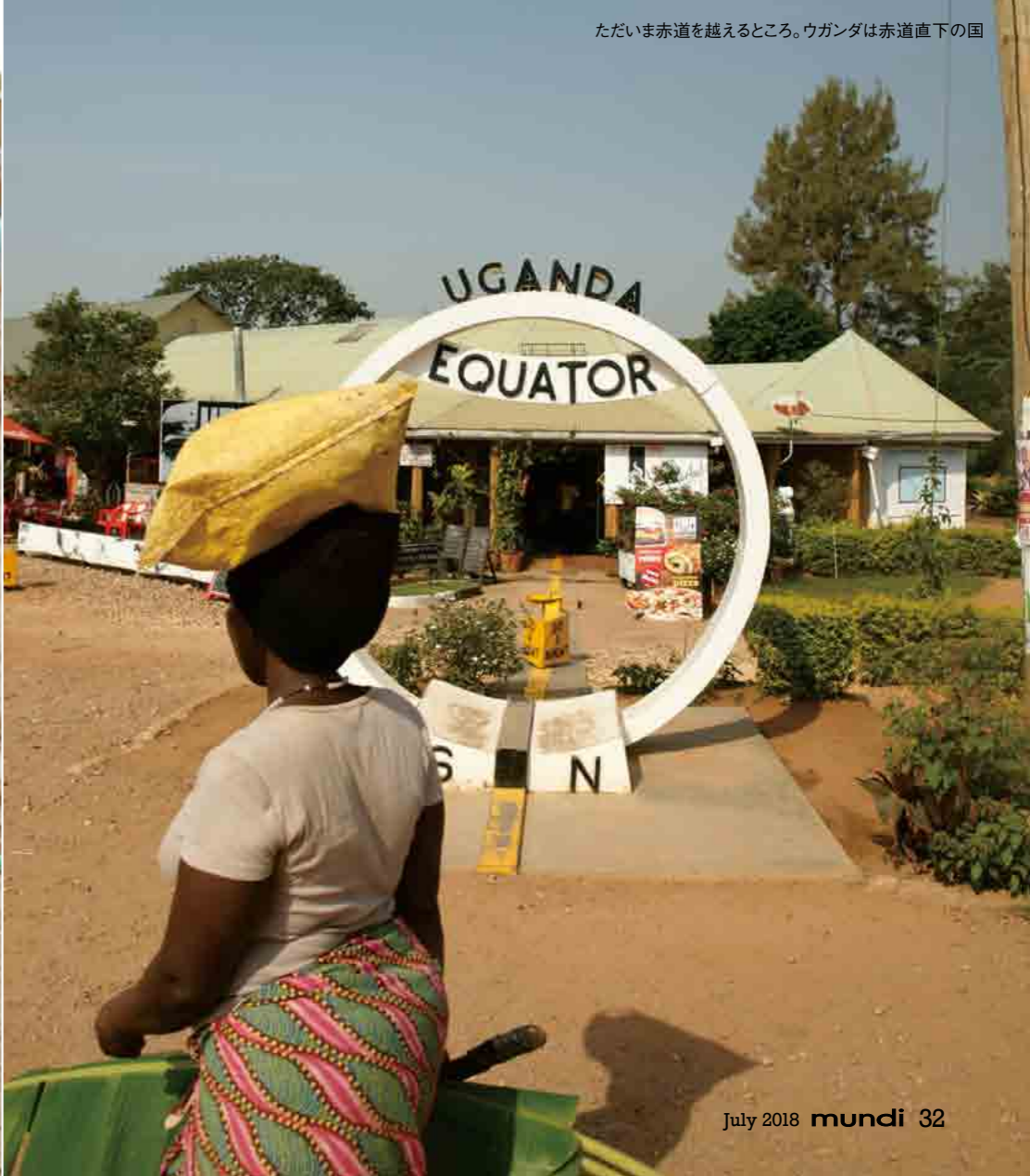
カヌング県のスタディツアーに期待をかけて新築している家。
ソーラー発電も設置予定



ミレット(雑穀)の地元料理を披露してくれた。
文化交流には最適



クイーン・エリザベス国立公園。
観光客を受け入れている村落で



ただいま赤道を越えるところ。ウガンダは赤道直下の国



アフリカ東部に位置するウガンダを、イギリスの名宰相ウィンストン・チャーチルは「アフリカの真珠」と称えた。世界第3位の面積のビクトリア湖や見渡すかぎりのサバンナ、標高5109メートルの山頂が万年雪に覆われ、古代より「月の山」と呼ばれるルウェンゾリ山地（世界遺産）、キバレ・フォレスト国立公園やブウィンディ原生国立公園（世界遺産）の熱帯雨林などの豊かな自然を、チャーチルは驚愕と敬意を込めて「真珠」と形容したのである。大自然の宝庫のウガンダはアフリカ屈指の観光地で、私は、本年2月末に「真珠」を満喫する機会に恵まれた。

* * *

ウガンダは、1980年代中頃に政治混乱に終止符が打たれた。現在は平穏な国に生まれ変わり、経済は堅調に発展し、生活水準は上がり、街はとても活気がある。空の玄関口、エンテベ国際空港はリニューアルの最中だった。各国からの投資や企業進出も盛んになり、かつての空港の規模では手狭になったに違いない。

ウガンダ観光の定番地、クイーン・エリザベス国立公園の雄大さには息を呑んだ。ポートクルーズでいとも簡単に遭遇するゾウやカバをはじめとする多数の野生動物は圧巻である。キバレ・フォレスト国立公園ではチンパンジーに、ブウィンディ原生国

立公園ではゴリラに出合った。熟練のパークレンジャーや公園スタッフの円滑な仕事ぶりに、彼らはまぎれもないプロフェツショナルだと感服した。日本出発前に、ウガンダ政府も観光産業に力を入れていると聞いていた。6日間の滞在中、一度も停電に見舞われなかったことは強調したい。弱点だったインフラ整備も順調で、ますます観光産業の充実と拡大が期待される。

ツーリスト誘致は地元の雇用を生み出す。ブウィンディ原生国立公園では、トレッキングにポーターとして地元の人を雇った。山道に付き添い、荷物を担いでくれるのは大助かりだ。私の若いポーターは、そのお金を学費の足しにして、学業を継続したいと望んでいた。「英語をもっと覚えなさい」と彼ははにかんだ。まだ高校生ぐらいの年齢だろう。学費が払えず休学していて、復学したいのか。

多民族国家のウガンダでは、全国一律に通用する言語がなく、民族語は地元が同胞の間でしか通じない。公用語は英語だが、学校に行かなければ習得は難しい。英語の習得は、将来のステップアップに欠かせない鍵であり、観光の促進は、若者の明日への希望や、地元の生活水準の向上につながる。クイーン・エリザベス国立公園内の村落を訪れるツアーも今後注目される。

現地でお世話になったウガンダ人のお宅におじゃました。ウガンダ西部のカヌング県にあり、街から少し遠い村で、新居を建築中だった。部屋が多いのは、ツーリストを受け入れたからだとのこと。ウガンダの一般家庭に泊まり、地元料理や伝統・文化を学ぶスタディツアーやホームステイには期待している。国際交流や文化交流には最適で、産業の乏しい地方部では新しいモデルケースとして興味深い試みだ。

豊かな自然という「アフリカの真珠」の恵みが明日への布石に結びつく。険しい山地でさえ段々畑として活用する勤勉さと、笑みを絶やさぬ穏やかな人柄のウガンダ人の努力を応援したくなった。

木下貴史 きのしたたかし

神奈川県川崎市生まれ。東海大学文学部卒業後、会社員を経て、フォトグラファーの道に進む。アフリカ取材に力を入れ、1か月歩き回ったカメルーンをはじめ、訪れた国は13か国。近年はネルソン・マンデラの足跡の地を丹念に追っている。目につくやすすいネガティブなアフリカのみではなく、ささやかな一歩でも懸命なアフリカ取材していきたくと願っている。
フェイスブック検索「木下貴史」



キバレ・フォレスト国立公園。チンパンジートレックのパークレンジャーは熱帯雨林の知識も豊富だ



ブウィンディ原生国立公園のゴリラ



クイーン・エリザベス国立公園のポートクルーズ・サファリにて



EVENT

『アフリカヘリテージフェスティバル in 東京』
アフリカのパワフルな魅力が詰まった3日間

アフリカの魅力を知ってもらおうと、新宿中央公園で3日間にわたってフェスティバルが開かれる。アフリカ各地の料理が味わえるフードコートや、カラフルな布や服、民芸品など多種多様なアフリカ雑貨が並ぶバザール、伝統的な打楽器「ジェンベ」を習えるワークショップなど、盛りだくさんの催しでアフリカの伝統と文化を存分に体験できる。毎年恒例のライブステージ・パフォーマンスにはアフリカンミュージックとダンスのアーティストたちが大集結！パワフルな生演奏は必見だ。知らない国の文化に触れるのはいつだってエキサイティングなこと。家族や友人とアフリカの魅力を発見しに出かけてみてはいかが。



会期:
7月14日(土)、15日(日)、16日(月・祝)
10:00~21:00(最終日は17:30まで)
会場:新宿中央公園・水の広場(東京都)
問い合わせ:アフリカヘリテージコミュニティ
TEL:045-479-2275
<http://africah.web.fc2.com/>

CONTEST

『持続可能な開発目標(SDGs)
学生フォトコンテスト2018』
撮ってみよう! 日本で見つけたSDGs

テーマは「身近なところから持続可能な開発目標を考え、写真で発信し、多くの人たちと共有する」こと。3回目となる今年から高校生も対象となった。募集しているのは、17あるSDGsのゴールの一つをテーマにした、ジャーナリスティックな報道写真や達成に向けた思いを表現したクリエイティブな作品。足元の課題の解決にはどうしたらいいのか、これからの社会を形づくる目標の達成に、私たちは行動や考え方をどのように変えていけばいいのか、また、どうすれば友人、家族、コミュニティにSDGsを知ってもらい、行動を促すことができるのか——世界を変えるアイデアを写真に込めて、コンテストに応募しよう。



©外山慎一郎(日本)「CRYSTAL」、2016年入賞作品

募集期間:2018年8月20日(月)まで
結果発表は10月24日(水)の国連デー前後を予定
応募資格:大学生・短大生・大学院生・専門学校生、および高校生(日本で学ぶ外国籍の学生・生徒を含む)*応募は日本国内で撮影された写真に限る。
主催:国連広報センター、上智大学



コンテストの詳細は公式ホームページでご確認ください。

新着情報
イチオシ!

MOVIE

『人間機械』

巨大繊維工場の"機械たち"の姿。
許しがたい現実の、美しい記録映画

リュミエール兄弟の『工場の出口』にはじまり『メトロポリス』や『モダン・タイムス』など、映画は絶えず人が生きて働くことの意味を問い続けてきた。本作もまた、人と機械をめぐる関係を重厚なリアリズムで描き、第三世界の過酷な現実へと観る者を引きずり込んでいく。舞台はインド北西部にある巨大な繊維工場。内部に入っていくカメラがとらえるのは、劣悪な環境で働く労働者たちの姿だ。グローバル経済の下、幼い子どもたちすら巻き込む労使の不平等、前近代的な労働の実態を告発する一方で、黙々と働く彼らの様子を淡々とつなぐ画面には、触れてはならないような静謐な美しさが漂う。「記録」と「芸術」の境界を横断する新鋭、ラーフル・ジャインの問題作。



2016年/インド、ドイツ、フィンランド/71分
監督:ラーフル・ジャイン
公開:2018年7月下旬、渋谷ユーススペースほかで全国順次ロードショー
<http://www.irc-tokyo.co.jp/ningenkikai/>

© 2016 JANN PICTURES, PALLAS FILM, IV FILMS LTD

BOOK

『マダム、これが俺たちのメトロだ!』

インドで地下鉄整備に挑む
女性土木技術者の奮闘記

経済成長にともなう都市化が進むインドでは、自家用車の急速な普及により交通渋滞や大気汚染などの問題が発生している。その対策の要となるのが、都市部と郊外をつなぐ地下鉄(メトロ)の整備だ。インド政府は1997年に日本の協力で始まったデリーメトロの整備を皮切りに、バンガロールやコルカタといった都市部でメトロの整備を進めている。本書の著者、阿部玲子は、プロジェクトの推進と統括を担う土木コンサルタントとしてインド各地の工事現場を担当。作業員が裸足で歩き回り、工期が当たり前のように遅れる規律を欠いた現場を、知恵と工夫を凝らして改善してきた。「女性に務まるわけがない」という周囲の不信を強いリーダーシップで乗り越え、着実にインドの人々の信頼を勝ち取っていった奮闘の日々が、豊富なエピソードとともに綴られている。



阿部玲子 著
佐伯印刷
1,620円(税込)

この本を1名様プレゼント
詳細はp.38へ



ウガンダ西部にも生息するチンパンジー。熱帯雨林を再現した展示場には10mを超える高さの木々が茂り、樹上生活を営む彼らの自然な姿を見ることが出来る



サバンナゾーンで見つけたマスクとネムの木。気候・地域によって8つのゾーンに分けられた園内は、文化的な意匠や植栽による演出が楽しい

よこはま動物園ズーラシア
横浜市旭区上白根町1175-1
開園時間:9:30~16:30(入園は16:00まで)
休園日:火曜(祝日の場合は開園し、翌水曜休園)、
12/29~1/1 *臨時開園あり
TEL:045-959-1000
<http://www.hama-midorinokiyokai.or.jp/zoo/zoorasia/>
動物展示・イベントの予定はホームページでご確認ください。



東アフリカの風景を再現した草原エリア。広々とした景色をチーターやキリンが横切り、サバンナの雰囲気を楽しめる

もっと地球ギャラリー
日本で発見!
ライオンのフラビア

写真・鈴木勝 文・大谷徹(編集部)

フラビアは「よこはま動物園ズーラシア」の人気者。2015年にウガンダからやって来た、人懐っこい雌のライオンだ。実は彼女、日本のライオンたちの未来にとっても貴重な存在なのだ。動物園には希少な動物を保全し次の世代に伝えるという大きな使命がある。そのためには遺伝的な多様性を保っていかなければならないが、日本では長いこと海外からライオンの個体導入が行われていなかった。国内のライオンを健全に保全していくために、フラビアの血統は期待されているのだ。

来日を実現した背景には、ズーラシアを管理する(公財)横浜市緑の協会と、

ウガンダ野生生物保全教育センター(UWEC)の長年の協力関係がある。緑の協会は2008年から9年間にわたってJICAとともにUWECの保全事業に協力し、飼育から運営にいたるまで幅広い技術支援を行った。UWECの取り組みは大きく前進したという。フラビアはその取り組みの証でもある。

現在も密猟や環境破壊など、さまざまな理由からアフリカの野生動物は減少している。動物園で動物たちの魅力に触れることは、楽しいのはもちろん、彼らの保全を考える一つの大きな入り口にもなる。フラビアもきっと、多くの人たちと出会うのを待っているのではないだろうか。



関東地方では梅雨明けが待たれるこの頃、いよいよ夏休みシーズンの到来です。海へ、山へ、故郷へと、旅の計画を前にワクワクされている方も多いことと思います。

「観光」が旅の大きな楽しみであることは国内でも海外でも同じですが、さまざまな開発課題を抱える開発途上国では、観光分野に多くの財政資金をつぎ込むことはできません。旅行者のなかには、ガイドブックを片手に遠路はるばる訪れたせつかくの大遺跡で、その保存状態や見せ方にガッカリした、という経験をされた方もいるかもしれませんね。

一方、観光の業界では従来型の「見る旅」から「体験する旅」への指向がますます高まっているのだそうです。その土地に根づく自然や文化資源があるがままを、旅行者自らも五感で楽しむことが、地元の人々にも恩恵を与え持続可能な発展をもたらす——そんな好循環を途上国でも実践していけるよう、JICAが各国と協力しながら奮闘する姿を、今号ではご紹介しました。

ところで、これから途上国に旅をされる方は、観光はもとよりそれ以外の分野においても「その国での日本の協力」に少し目を向けてみると、より印象的な旅となること請け合いです。その地で最初の一步を踏む飛行場から、街中の道路や鉄道、離島に渡る港の埠頭など、目につきやすいインフラの整備から、地方の農村の振興、学校校舎や病院の建設に至るまで、日本の支援は意外なところまで及び、現地の方たちの役に立ち、喜ばれています。一人でも多くの日本人が「信頼で世界をつなぐ」JICAの現場に触れてくださるとうれしく思います。ぜひJICAのホームページから、「気になる国」での取り組みを探してみてください！

広報室広報課 原三佳



柄も豊富な「Ashi」のポーチ。シェムリアップに2店舗あるKumaeの直営店をはじめ複数のお店に置かれている

MONO語り
Vol.117 カンボジア

アンコール遺跡群の観光拠点、シェムリアップで見つけたポーチや財布、名刺入れ。ナチュラルな風合いに思わず手にとってしまう。素材は、バナナの茎の繊維を独自の加工で破れにくく仕上げた手作りのバナナペーパー「Ashi (亜紙)」。作っているのは、シェムリアップから約25キロ離れたアンルンピー村の女性たちだ。

実はこの村、豊かな田園地帯だったが2000年頃よりアンコールワットやシェムリアップからごみが運ばれ、「ごみ山」として有名になっていた。カンボジアが好きで移住していた山勢拓弥さんはそれを目の当たりにし、ごみ集積所で働く人たちのために仕事と教育の場をつくりたいと考えた。しかし、どんな事業ができるだろうか？ 悩んでいたところ、アフリカでバナナペーパー作りを経験していた人を紹介され、それをカンボジアで事業化するために Kumae を立ち上げた。「マーケットとしては小さいですが、エコで地球にやさしい素材という評判が広がって、認知されるようになってきました」。

バナナペーパーを作るようになって村の

バナナの繊維が
丈夫な紙に
大变身

文・久島玲子(編集部)

人たちは健康的な生活に戻り、お化粧をしたり、恋愛をしたり、普通の人間的な暮らしができるようになっていく。「ごみ山で働かなくていいのはうれしい」「私の子どもたちが大きくなったときにも、この仕事を受け継いでほしい」などという言葉が山勢さんの励みになっている。「これからは、バナナの繊維で布を作りたいです」と山勢さんの夢は広がる。



バナナの茎から繊維を取り出し、バナナペーパーを作る村の女性たち。手漉き作業だから素材で温かな味わいが生まれる

商品の購入はKumaeHPまで ▶ <http://kumae.net/>

プレゼント
付き!

アンケートのお願い

本誌へのご意見・ご感想や
JICAへのご質問をお寄せください。

JICAでは本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を募集しています。巻末のアンケートはがき、Eメール、またはファクスに、下記項目を明記してお送りください。

- 氏名 ●住所 ●電話番号 ●年齢 ●性別 ●職業
- 本誌を入手した場所 ●面白かった記事
- 本誌へのご意見・ご感想 ●JICAへのご意見・ご質問
- ご希望のプレゼント番号

*いただいたご意見・ご感想は、本誌やJICAのホームページに掲載する場合があります。あらかじめご了承ください。ご記入いただいた個人情報はプレゼントの発送および誌面の向上に役立てること以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。

Eメール: ML_JICAPR@jica.go.jp
FAX: 03-3524-9675 (『mundi』編集部宛て)

◎応募締め切り:2018年8月15日

2018年7月号のプレゼント

- ① ベトナムのお土産。オレンジ農家が作った芳香剤4名様 (p.11 参照)
- ② ベトナム観光総局のフォトフレーム(切手付き)と
ビズップ・ヌイバ国立公園のポストカード2名様
- ③ 書籍「マダム、これが俺たちのメロだ!」1名様 (p.37 参照)



本誌をご希望の場合は
下記方法で
お申し込みください

申込方法

巻末の払込取扱票に、氏名・住所・電話番号・ご希望の送付期間・送付開始月号を明記の上、指定の金額(送料+手数料)を郵便局でお支払いください。入金確認後、発送の手配をいたします。入金から1週間程度かかることもありますのでご了承ください。
*複数冊、またはバックナンバーをご希望の場合は送料が異なりますので、下記までお問い合わせください。



申込先:株式会社 木楽舎 編集企画室(発送代行)
住所:〒104-0044 東京都中央区明石町11-15 ミキジ明石町ビル6F
TEL:03-3524-9572 FAX:03-3524-9675
Eメール: ML_JICAPR@jica.go.jp

次号予告(2018年8月1日発行予定)
8月号 特集 フードバリューチェーン

食料の安定確保は依然として多くの開発途上国の課題ですが、市場指向型の「売れる農業」の重要性も増えています。農業産品に新しい価値を与えるフードバリューチェーンの視点から、農業支援の現場をご紹介します。

『mundi』バックナンバーはJICAホームページでご覧ください
<http://www.jica.go.jp/publication/mundi>



mundi

JULY 2018 No. 58
編集・発行:
独立行政法人 国際協力機構
Japan International Cooperation Agency (JICA)

〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル
TEL:03-5226-9781 FAX:03-5226-6396 URL:<http://www.jica.go.jp/>
本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。



私の
なんとかしなきゃ!
vol.93

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやSNSを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

なんとかしなきゃ

映画『クジラの島の忘れもの』は、夢をなくした女性と夢を追いかけるベトナム人の青年が、運命に導かれるように出逢い、自然に惹かれ合い、そして国境を超えて愛を貫く姿を描いたヒューマン・ラブストーリー。大野いとさんは本元愛美役で出演した。写真上:ホイアンにある日本橋でのシーン/下:カントーで開かれたイベントに参加した大野さん(写真中央)と参加者のみなさん

映画の撮影で初めてベトナムを訪れました。『クジラの島の忘れもの』という映画です。仕事やプライベートで欧米を含め10か国以上に渡航していますが、ベトナムは初めてです。アジア圏ではインドネシアやバリ、タイを訪れたことがあり、料理が美味しい印象がありましたから、ベトナムでも美味しいものに会えるのではと楽しみでした。撮影の合間をぬって、スタッフの皆さんと一緒にダナンの町に出かけたときには、チェーという甘く煮た豆や果物をのせたかき氷のようなスイーツに出会い感動! 地元の人たちでにぎわう、日本でいう居酒屋のような大きな路面店で食事をし、活気あるベトナムの町を堪能しました。中でも町の人たちのやさしさが印象に残っています。町で出会った人たちは、微笑んで一緒に写真を撮ってくれ、私が観光客であったということを差し引いても親しくあたたく接してくれました。

今回の映画で、森崎ウィンさん演じるコア君は、日本で研修を受けるベトナム人男性の役でした。誠実で、まっすぐな青年を演じていますが、実際、ベトナム

でお会いした皆さんにも同じようなやさしさを感じています。映画の中に、私が演じた愛美の誕生日シーンがありますが、撮影時、ベトナム人の出演者たちは、少し人見知りの私に積極的に話しかけてくれ「誕生日では先に願いごとを言うんだよ」「ベトナムでは食事の前に合掌はしないんだよ」など、文化や風習の違いを教えてくださいました。

今年は日越国交45周年にあたり、この映画もその記念作品として製作されました。昨年11月、ホーチミンから車で約4時間かかるカントーという町で開かれた日越国交45周年のイベント「越日経済・文化交流フェスティバル」に参加しました。歌があり、踊りがあり、私は映画を紹介したり、アオザイを着たりと、町を挙げての大きなイベントに素敵な経験をさせていただきました。お祭りに町中が盛り上がる様子や町を流れる大きな川、町にあふれる素朴な空気に、カントーほど大きな町ではありませんが私の故郷、福岡を思い出し、懐かしく感じました。またカントーを流れる川には、大きなカントー橋が架かっていました。日本が協力し架

心に残る風景を伝えていく

女優 **大野いと**
Ohno Ito



けた橋だと教えていただき、日本とベトナムのつながりを感じました。

撮影で訪れたホイアンにある来遠橋(日本橋)も日本とベトナムをつなぐ有名な場所で、16世紀に日本人が架けたといわれています。映画の中でも登場しますが、ベトナムでも特に忘れられない場所です。日本を思い出すだけでなく、どこか懐かしい、ホッとする素敵な場所——とにかく、美しい場所でした。

私は映画を通じて日本とベトナムのつながりを知る機会をいただきました。次は私が、今回得られた感動やベトナム人の誠実で魅力的な人柄、美しい風景を多くの方に伝えていきたいと思っています。

おおのいと

1995年、福岡県生まれ。ティーンズファッション誌『Seventeen』専属モデルとして活動を開始。「高校デビュー」(2011年/英勉監督)で映画デビューを主役で飾る。以降、『愛と誠』(12年/三池崇史監督)から「兄に愛されすぎて困ってます」(17年/河合勇人監督)、本作品『クジラの島の忘れもの』(18年/牧野裕二監督)などの話題作に出演。近年は舞台出演にも活動の場を広げている。今年には「TANIZAKI TRIBUTE/悪魔」(藤井道人監督)が公開され、2019年には主演映画『燈火、風の盆』(坂下正尚監督)の公開が控える。